

〈講演会記録〉

諸科学融合の場としての世界問題研究所

— 歴史と展望 —

曾我見 郁 夫

The Institute for World Affairs as a Place for Fusion of Various Sciences: Its History and Future

SOGAMI Ikuo

解題

ここに掲載したものは、令和3年4月28日(水)に開催された世界問題研究所主催の講演会「諸科学融合の場としての世界問題研究所 — 歴史と展望 —」の記録である。

世界問題研究所は、昨年度より新テーマ「科学技術の発展と人類社会の変化」を掲げ、研究所をあらためて文理交流の全学的フォーラムへと展開すべく、人文・社会科学系と自然科学系の研究者間の対話を模索してきた。その手始めとして、令和3年度より研究所に自然科学系の研究者を招き、自身の研究テーマを平易に解説してもらい、講演会シリーズを実施することにした。標記の講演会はその初回にあたる。

我々はシリーズ最初の講師役を曾我見郁夫京都産業大学名誉教授をお願いした。曾我見先生は、理学部長、益川塾副塾頭を歴任された、本学自然科学系の重鎮であり、また昭和50年代前半に世界問題研究所の共同研究プロジェクトに参加され、若泉敬先生や三木新先生、廣岡正久先生らとともに研究所第二の隆盛期を築かれた、我々の先達である。また曾我見先生は理論物理学を専攻される一方で、荒木俊馬先生、湯川秀樹先生と共通して、人文・社会科学に対する深い造詣をお持ちである。我々のテーマにとってこれ以上相応しい方は外にないと考え、講演会シリーズ全体の基調講演をお願いした。

演題は、曾我見先生が自ら決められた。講演の主な内容は、演題通り、世界問題研究所の歴史と将来展望をめぐる先生ご自身の経験談である。初期の研究所は本学における文・理の垣根を越えた知的交流の主舞台であったから、そこには、上にお名前を挙げた方々以外にも、本学の初期史を彩る数多くの人物名が登場し、講演はさながら“人物論による京都産業大学史”の観を呈している。特に1970年代後半に3年連続で開催された世界問題研究所シンポジウム「世界における日本の文化」の回想は圧巻である。また質疑応答の部分で登場する、共同研究の在り方についての提言は傾聴に値する。特に、“自分の文章を磨き上げる個々の努力も良いが、それ以前に短文でよいから新説を大胆に提案し、それを互いの中で共有・継承する努力が必要だ”、と指摘されたことは、共同研究に及び腰な文系の我々に対する厳しくも温かい叱咤激励として心に響く。

講演会の前、曾我見先生は、ご自身の研究や国際学会誌の査読などで多忙にされ、またすでに体調に

やや異変を感じておられた。当初講師役を躊躇されたものの、あらためて企画趣旨を丁寧に説明したところ、「そういうことなら自分が一番バッターになるべきやろうね」とご快諾いただいた。先生は、「この機会に詳しく伝えておかんと」と事前に語られていた通り、パワーポイントで60枚以上のレジメを準備し、当日は講演会と懇談会とで3時間半の長丁場を精力的に熟して下さった。しかしその後、曾我見先生は、病状が悪化したため昨夏以来入退院を繰り返されるようになり、ついに2021年12月15日（水）に逝去された。こうして、当初思いもかけなかったことに、本講演会記録が先生の早過ぎる遺稿となった。

先生が病床にあった頃、我々は、本紀要への講演録掲載をe-メールでお願いし、先生から「文理融合の一例になれば」と快諾の返事を頂いていた。したがって本講演会記録は、講演会の録音を文字起こしした原稿に基づき、川合の責任においてそれを編集したものである。編集に際して、読者に分かり易いように、全体を、第一部「講師紹介」、第二部「講演」、第三部「質疑応答」の三部に構成し、講演内容と直接関わりのない事務的なやり取りなどを除いて、録音内容の全てをできるかぎり忠実に再現するよう努めた。第二部は二十数頁の長文に及ぶため、川合の判断により、内容上のまとまり毎に適宜見出しをゴシック体で挿入した。なお第三部の途中で第二部の後半が再開されている。それを明示するため、その始まりに「研究所の今後を語る」という見出しを、その終わりに「質疑応答の再開」という見出しを、それぞれゴシック体で挿入した。講演は、60枚余のレジメを画面上に提示し、それを参照しながら行われたため、録音を文字に起こしただけでは文意を取りにくい箇所を少なからず含む。その場合には、川合の判断で、提示されたレジメの内容を、講演の中に〔 〕書きで盛り込んだり、文末註や図として付したりして補った。音声が届き取りにくいために、どうしても確定できなかった3箇所には、〔?〕の符号を付した。第一部と第三部では、発言の冒頭に発言者の名前をゴシック体で記し、最初の発言では姓名を、2回目以降では姓のみを記載した。講演中に登場する人物名については、本学関係者にもみ文末に註を付し、それ以外については川合の判断で必要に応じて文中に〔 〕書きで補注を加えた。したがって文中に〔 〕書きで記されてある箇所と文末註とは、全て川合による挿入である。なお、講演会は教室での対面とオンラインとのハイブリッド形式で実施され、講演会後に場所を変えておこなわれた懇談会は人数を絞って対面形式で実施された。懇談会については、録音されておらず、ここにも掲載されていない。

曾我見先生は常日頃我々に、「命は短いんやから、研究は大胆にやらんとあかん」と語っておられた。ご自身、その言葉通りに生き抜かれたように思う。我々の無理な願いを聞き入れ、研究所をめぐる貴重な経験談を遺して下さった先生のご厚意を無にすることはできない。一層の精進をお誓いしますとともに、曾我見郁夫先生の御冥福を所員一同心よりお祈り致します。

2022年1月15日 世界問題研究所長 川合全弘

第一部 講師紹介

司会（耳野健二）： 皆さん、本日はお忙しいところお集まりをいただきまして、誠にありがとうございます。こちらは京都産業大学世界問題研究所、令和3年度第1回の研究会の会場です。今日は、本学の理学部名誉教授でいらっしゃいます曾我見郁夫先生をお招きして、お話をいただきます。おむね2時間ぐらいを予定しております。よろしく願いいたします。

開会に先立ちまして、まずは、世界問題研究所の所長、川合全弘先生から、今日の趣旨と、曾我見先生のご紹介をいただきます。よろしく願いいたします。

川合全弘：川合でございます。今日ご講演いただきます曾我見郁夫先生のご紹介を兼ねて、ひと言ごあいさついたします。世界問題研究所では、昨年度に「科学技術の発展と人類社会の変化」という共同研究プロジェクトを発足いたしました。科学技術の弥増す発展が、人類社会にどのような変化をもたらしつつあるのか。その行く末を見通すために、われわれはどこに、どのような指針を求めればよいのかを考えようという、壮大なテーマの研究でございます。現在のメンバーは、人文・社会科学を専攻する7名だけでございますが、ワンキャンパスという本学の地の利を生かして、今後、自然科学系の方々にもご協力をいただきまして、本格的な文理融合の共同研究に発展させることを念願しております。

さて、本日はその第1回目に最もふさわしい方を講師としてお招きいたしました。曾我見郁夫先生は、湯川秀樹先生の最後の弟子であられ、荒木俊馬先生に請われて、草創期から本学理学部の建設に従事されました。のちに、理学部長、益川塾副塾頭を歴任されています。他方で曾我見先生は、昭和50年代前半に、世界問題研究所にも所員として参加され、若泉敬先生や、廣岡正久先生とともに、当時の研究所の隆盛に大きく貢献されました。

本日のために、研究所員全員に対して、当時先生が書かれた論文の抜き刷りをいただいております。この抜き刷りなのですが、「諸科学の相互批判への試論（Ⅱ）——大同盟の崩壊と核軍拡競争の勃発——」と題する論文でございます。これは、1930年代から1940年代にかけての、大国間関係の推移と、原子核物理学、原子力工学の発展とを重ね合わせて、大国による原爆・水爆の開発競争へと至る歴史の筋道が、非常に明解に論じられてあり、私は、外交史と科学史とを連結させた文理融合研究のお手本として拝読しました。私がこの論文で最も深く感銘を受けたのは、この末尾に記された一文でございます。そこには、こうあります。「したがって、東西対立は、二分法的な原理的対立ではない。この単純なる帰結も、われわれが戦わなければならない思想戦には、大きな糧となるであろう」という文章ですが、そのなかの、「われわれが戦わなければならない思想戦」、この一句に私は打たれました。ここで言う「われわれ」とは、世界問題研究所を指しているかと思えます。そして、そこにおける共同研究が、「思想戦」と表現されているわけです。際限のない核軍拡競争という世界問題との取り組みを、当時の研究所がこれほどの緊張感を持って、そしてまた、いわば戦友としての共同意識を持っておこなっていたということに、深い感銘を覚えた次第でございます。本日は、その当時の世界問題研究所の様子を、種々のエピソードを交えながらお話しただけと伺っております。われわれ自身の文理融合研究の有意義なスタートとしたいと存じます。何とぞよろしくご願ひ申し上げます。以上でございます。

司会：川合先生、ありがとうございました。それでは早速、曾我見先生にお話をいただきたいと思えます。よろしくご願ひいたします。

第二部 講演

曾我見です。よろしく申し上げます。川合さんとは、もう35年以上のおつきあいで、ずいぶん自由に学問を論じてきた仲です。そして、ひと回りほど私が年上なので、これは非常に不利なんですけど、いろいろ勝手なことを、上から目線というか、年寄りとして、川合さんにはいろんなことを言ってきました。川合さんもお存じのような人柄で、私の言うことを受け止めていただいて、それで付き合ってきた。これは、私にとってはずいぶん借りなんです。先月、世界問題研究所の経験を語ってほしいと言われたときに、逃げられないんですね。それで引き受けざるを得ないので。ただ、まとまった話ではできないよ、と。これははっきり言いました。いろいろあとで質問をしていただいて、バランスを取っていただければと思います。そのときに、テーマとして、今回皆さんが掲げているテーマは非常に大きい。それに見合うように大きいタイトルにしました。そして話のウエイトは歴史にあります。極めて私的な、私が見た当時の世界問題研究所、いろいろエピソードというか、皆さんが本当に知らなかったそういうことを努めて挟みながら、報告していきたいと思います。

研究所史の概観

まずこれは、昔話なわけですよ。これがメインなわけですけども、それで簡単に概観をします。そして、この「最盛期」と私が勝手に感じている時代のことをお話しするわけですが、私的な総括として。特に、共同研究で、シンポジウム形式でやりました。若泉先生¹⁾が非常にお元気だった時代なので、ここにウエイトを置いて話をします。そして、バランスを取るために、その共同研究を踏まえた個別研究のことにちょっと触れます。どうしても若泉先生の思い出が一番私にとっては大きいので、先生が産業大学を去るときに、部屋に見えられて、私に向かって質問をされたわけですが、そのときに、十分にお話しできなかったんじゃないかと今も残念に思うんです。それを今回、こういう場で皆さん人文科学系の方々が、物理の話の聞いたりすることもないでしょうから、私が京都市に頼まれて中学生なんかを相手にして話をした資料が残っておりましたので、それを踏まえて、湯川の間子論の話の話をします。その中に若泉先生が疑問に思ってきた事柄に対する答えがある、と思いますので。それで、いったん私の歴史を振り返る部分をここで終えて、質問があったらそこで質問していただくとよい。これがメインなんです。そして、そのあと、これからの話なんですけれども、「諸科学の融合の場としての世界問題研究所」、産業大学のことを論じたいんですが、なんせ先月、川合さんにリクエストを受けて、実は教え子との共同研究なんかもありまして、時間がなかなか取れずに、というか、頭のなかを整理することがなかなかできなかったんで、この部分は、書きましたけれども、あまり時間を割くことはできないし、中身も薄くなっちゃうと思います。そして、案外私が身勝手なことを言うことになるかもしれません。だから、前半がまずは昔話です。研究所の歴史を振り返るということで、前半のメインの部分のお話に入ります。

まずは大きな流れとして、このステージをⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶと分けまして²⁾、特にこのステージⅡとⅢ。これは、若泉先生が非常にお元気に活躍をされた時期ですけれども、そこにウェイトを置いて、そして、これから皆さんが研究をしていく、ここⅦ期に最後は触れていこうと思います。産業大学の世界問題研究所史の総括は、所長がされておりました³⁾、これは、皆さんはご存じだと思います。見せていただきました。オーバーラップするとか、これも観点が違いますので、一部分クロスするぐらいですけれども、皆さん、これと比較しながら聞いていただければと思います。

まずはステージⅠですが、1966年から1969年で、荒木俊馬学長⁴⁾も積極的に関与されて、産業大学の東京事務所に世界問題研究所がオーバーラップして存在していた。岩畔豪雄先生⁵⁾、若泉敬先生。若泉先生については、私は若泉さんとずっと呼んできたので、これからも若泉さんと呼びます。当時のテーマが「学問の将来と大学の在り方」で、産業大学の教学体制、理想的な教学体制を求めて、皆さん議論をされていた。非常にたくさんの人たちが東京まで出かけて行って、少壮教員の研鑽の場になっておりました。そして、大学の顔でもあり、世界への窓口でもありました。林語堂先生とか、トインビー先生とか。特にトインビーさんが本学に来られたことは、日本全体にも非常に影響が広がって、所員の皆さんも、このトインビーさんから非常に啓発されていた。これはあとからも出てきます。残念ながら私は、トインビー先生にお会いできていないんです。この時代に世界問題研究所は、もう産業大学と一体であったと言ってもいい。こういう時代ですね。

実は、大学が1965年にできて、東京事務所はもちろん活発に創立前から活動をしていて、1966年に世界問題研究所がそこにできるわけですね。ちょっと私事ですが、1965年は、私は大学院の博士課程で研究をしておりました。実験系の仲間が、産業大学、産業大学と言うんですね。1965年、その少し前ぐらいから、産業大学、と。産業大学で研究してくるといようなことを言うんですね。なんだろう、と思っていると、京都大学の理学研究科なんかよりも、はるかに素晴らしい実験装置、X線発生装置、電子顕微鏡とか、そしてNMR〔核磁気共鳴装置〕なんかは、京都大学にはなかったんです、産業大学にあって。私の同級生たちは、一所懸命に産業大学に来て、こちらで研究する。ただし条件がある。実験を手伝って、助手の形で、大学院生で助手を兼ねていたんです。実はそれが、彼らには大変な重荷に将来なっていくんですけどね。3年間博士課程を終えると同時に、その人たちは産業大学の講師になります。それで、実験の場合は大変なんですよ、準備をしたりするのがね。私のほうは理論ですから、ゆったりと大学院博士課程を終えて、そのあと3年、湯川先生の研究所のほうでさらに3年研究を続けて、学位を取ってからゆっくりと産業大学に、1969年に来たわけです。実験の仲間たちには本当に申し訳なかった。これはお返しをせんといかんというので、私はこちらに来たときに、できる限り実験の人と共同研究をしよう、と。至らぬところはあるんですけども。私も、純理論ですけども実験室に出入りして、実際に共同研究をします。そして、学位を取れずに来た方が学位を取るのを手伝いもしました。それで、私の一番の研究分野は、素粒子論の理論なんですけれ

ども、宇宙論にも絡んできますし、今の素粒子論は。それにプラスして、実際に実験をやる、ここでやる。物理と、化学と、生命科学とかのちょうど中間領域なんですけれども、そちら〔の実験〕も私たちの仲間、先に産業大学に来た仲間と研究するというので、そういう研究テーマも増えることになります。大変しんどかったですけれども、今となっては非常によかったと思っています。これが第1ステージなので、世界問題研究所自体に対して、このステージIへの私の貢献はほぼない。

そして、第2ステージになりますと、東京事務所にある世界問題研究所と、そして京都産業大学のキャンパスの中での世界問題研究所ということで、依然として荒木俊馬先生は、時間のある限り研究所の集まりに参加して下さって、そして、若泉先生がリーダーで、法学部の三木新先生⁶⁾、そして外語におられた西原さん⁷⁾、彼は、後に防衛大学校に行つて学長になります。メインテーマは「世界問題と日本問題」。学部の枠を完全に超えた共同研究がなされたわけです。学長から声をかけられ、若泉先生から声をかけられて、私たちは逃げられない。依然として世界問題研究所は、世界に開かれた窓口でした。例えば、理論物理のドイツの大家、大統領ワイツェッカーの兄ですけれども、ワイツェッカー先生も来られました。やはり世界問題研究所は、別格の存在、組織だったわけです。これは、最盛期だったと思います。非常にいろんな人と一緒に活動ができて、非常に私自身ハッピーな時代でした。ここの部分が報告の中心になります。

そして、1980年代になると、荒木俊馬先生の急逝がその前〔1978年〕にありましたので、東京事務所、東京の世界問題研究所も廃止になって、ここで質的転換期が訪れます。若泉先生、ここはレジュメで名前がちょっと薄く書かれていますけれども、本当に若泉先生はある意味で失意の時代。三木先生が頑張り、佐藤先生⁸⁾も頑張りました。テーマはやはり「世界の中における日本」ということで、研究は継続されます。ですが、創立期の個性とか、勢いというものが、はっきり構成員として生で体験しているわけですけれども、ここで勢いが失われていく時代ですね。

そのあとは、言っちゃ悪いんですけど、惰性の時代です。個人としては、この皆さんは全部親しくしてもらっていますから、それは別として、世界問題研究所は、研究機構の統合の下に、管理の下に置かれるという時代になります。ですから研究所に対して私は、ほぼ無縁になります。人的なつながりは濃厚に残っています。続きました。そして、この現在の第7ステージに至るわけで、皆さんは「科学技術の発展と人類社会の変化」という大きいテーマの下で研究をこれから継続されていくわけです。理工系学部からどのような協力を得ていくのか。気持ちの上で存在意義を求めて、再出発という気持ちで頑張ってくださいと思います。新たな勢い、活力を、ここで取り戻していただきたいと思っています。

それで、メインの部分、Ⅱ期とⅢ期の話になります。最盛期の活動に、私自身がどう関与していったか。私的な総括をしていきたいと思っています。社会科学、人文科学、自然科学の分野から、本当に皆さんが参加しておりました。まず1976年から1977年の話。そして、1978年から1979年の話をメイ

ンにします。ちょうどその中間のところ（1977～1978年）は、私は別の仕事がありまして、荒木俊馬先生から言われたもう一つのやらなきゃならん仕事がありまして、私はエネルギーをそちらに割かれることになります。

その時代背景なんですけれども、米ソ冷戦がすさまじい時代から少しデタント期というか、平和の可能性が見えてきたと思ったら、またおかしくなり始める時代です。これが、この時代です。ところが日本は、安定した経済成長を始めています。そして、その経済成長の前期から中期に至る時代です。こういう時代背景を反映しています、この共同研究は⁹⁾。皆さんはこの時代背景に振り回されて研究をしていたら駄目なわけです。われわれは、常にこれを意識していました、時代背景をね。

第1回シンポジウム（1976年度）のこと

まずは第1回です。若泉先生が、非常に気合が入っていた時代ですね。三木先生と若泉先生がタッグマッチを組んで、自然科学系では、私は、三木先生とも若泉先生とも気が合ったということもあって、何かあると引っ張り出されるというか、そういう形で、私自身も参加してきたわけです。ですが、三木先生は法哲学なんですね、言葉を選んで非常に厳密に語られる。私はそれになかなかついていかれず、「分からん」とはっきり言って、私の言葉でしゃべりました。私のしゃべるのは、三木先生はもちろんぱっと理解するわけです。ですが、大いに三木先生に、若泉先生に学ばせてもらったわけです。第1セッションとして「日本のエトスについて」。第2セッションは「文化の創造性と模倣性」。これには、私はかなり異論があったんですけれども。そして第3は「国際的使命の自覚」。これは、若泉先生が常に語られた事柄です。そして第4「課題と展望」ということで、第1回のシンポジウムがおこなわれます。再度繰り返しますが、時代背景は米ソ冷戦のデタント期です。このときは、まだまだ期待があって、危惧が少し入っていた。そして、日本は安定した経済成長ですね。そして何よりも大学は、創立期の活力がまだまだ張っておりました。研究所の状況は、大学と研究所は一体でしたし、研究所は大学の次なる発展の原理を求めて活動していたと言ってもいいと思います。そこで若泉先生のシンポジウムへの期待と言いますか、序説にこうあります。「全く新しい価値観、秩序原理、学問体系を創り出そう、少なくともその手がかりをつかもう」。実は、若泉先生は非常に謙虚な方なんですけど、ここまではっきり語られることは珍しいんですけれどもね。こういう旗印の下で頑張ろう、と。この文章があつと二度ほど出てきます。そういう若泉先生の希望、期待の下で、研究、シンポジウムがおこなわれるわけです。

三木先生が問題提起します。デタント期というふうには世間一般に言われてきたけれども、やっぱり危惧は去っていない。むしろ危機の全面性が顕在化し、さらに深まりつつあるんだ、と。人類、人間存在の運命共同体、これは、どうあるべきか、どうなっていくんだろうか。そこで、三木先生の表現を借りれば、「現存する平和を支える論理は『戦争の論理』に外ならない」。「われわれがマルクス＝レーニズムの体系をすら全体として否定しうる学的体系を未だ確立していない。それは何故か、何処

に問題があるのか?」、ということですね。合理性、イデオロギー云々。その背後に人間性というか、人間的な何かに関わる問題、特にわれわれにとっては、日本文化・文明に救いを求める、何かを求める、その必要がある、と。まずわれわれにできるのは、日本を知ることであるということで、日本のエトスとして「祀る神と祀られる神」。ここは「と」なんですね。「祀る神と祀られる神」、両者を「と」で並列して、三木先生は問題提起をされたんです。この問題提起の背後に、三木先生は、「現存する〔精神的枯渇〕気運」と明言される、言われるんですけども、しかし同時に日本文化・文明を肯定的に評価し、そこにやっぱり救いが求められるんだという思いがここにあったわけです。繰り返しますが、「祀る神と祀られる神」。「祀る神が祀られる神」じゃない、あくまで「と」です。

この問題提起の直後、若泉先生がぱっと私に振ってきまして、覚悟はしていたわけですけども、三木先生の問題提起へ、私は同意を表明し、そして、危機への楽観的認識を私自身は持って、それを踏まえた上で「祀る神と祀られる神」を、私流に素朴に解釈することで、三木先生から私はバトンタッチを受けました。日本列島に古来存在した諸部族の統一の歴史をこれは反映している、と。全面的な殺戮を伴わない融合の歴史がこの日本にはあった。それが「祀る神と祀られる神」という形に表現されるのだ、と。海と山と谷で隔てられた、この日本の風土ですね。豊かです。同時にしかし、地震が来、火山が爆発しと、非常に厳しい風土です。その海や、山や、谷で隔てられながらも、結びついていく共同体、村落共同体。その結びつきの過程、それが「祀る神と祀られる神」という形で表現できる日本文化の根底にあるものであろう、と。それはどうしても自然と融和せざるをえない風土です。そこに生きる人たちが、共通して文化をつくり、言葉をつくり、言葉自身も育ててきた。その「やまとことば」の中に集約されている生命力というもの、そこに注目すべしという、われわれは注目するんだ、ということですね。

例えば、仏教と神道の融合、本地垂迹等々の絶えざる創意がありました。ずっと長い歴史で、長い歴史の淘汰に耐えた柔軟で強靱な文化である。中華思想、中国からの影響は非常に強いわけですが、しかし決して小中華になることはなかった。西洋文明の影響もどんどん入ってきますけれども、準ヨーロッパにはならなかった。そこの日本の独自性、それはやっぱり強靱な何か、だったわけですね。中国、韓半島を見ますと、いわゆる易姓革命で、過去の王朝の歴史を否定するというか、現王朝が都合のいいように書き換える。墓を暴いてしまうような、そういう文化とは違うわけですね。これは明確に違います。今現在の中国、韓半島を見ても、違いがはっきりします。これは、いい、悪いとか、そういう問題ではなくて、違うわけです。

これは、1970年代にわれわれがシンポジウムをやっていた頃にはまだはっきりしていませんでしたが、その後、日本の男性に伝わってきたY染色体、これに非常に独自なものがずっと保持されているんですね。世界では珍しい。山岳地帯の小さい民族の中とか、東洋の島の中にも、ユダヤ人の中にもそういうY染色体の特異なつながりがありますが、日本の場合、それが非常に色濃く残ってい

ます。これは、長い豊かな縄文時代を反映しているんだと思います。そういう議論をしました。ご存じの和辻哲郎の場合は、「祀る神が祀られる神」であって、それが天皇制へとつながる。しかし私たちは、このシンポジウムでは、天皇制は一切論じませんでした。意図して論じませんでした。

シンポジウムで対決し合うわけですから、佐藤さんがこの私の話に対して、意図的に反論をしてくれました。佐藤さんは、トインビーと歴史学者との話し合いに触れまして、トインビー先生が、春日大社、伊勢神宮を訪れて、ここに宗教性の原点がある、深く感銘を受けたということ、世界問題研究所の皆さんに話したそうです。佐藤さんは、ギリシャの宗教、ローマの宗教との類似性がそこにあるとトインビーさんが指摘していたこと、それを受けて考えてみると、日本の「祀る神と祀られる神」という指摘、そこにあるものは、人類の本来の宗教性に横たわる共通性ではないのか、という反論をしました。さらに佐藤さんは、実はキリスト教神学では、日本の宗教性が、その始原の状態で止まっていると解釈される面もある、と。あえて佐藤さんはそういうことを言われたわけですが、トインビーさん自身は、こういうことを語っているわけですね。「民族の神話を学ばなかった民族は必ず滅びる」、と。これは調べて見ても、どこにあったのか、よくその出典はわからなかったんですが、ただあらためて考えてみると、このトインビーさんの指摘は、確かに納得しないといけないようなところもあるんですけども、例えば今、中国を見よ、と。易姓革命で、前の王朝を否定し、それを繰り返してきた。しかし、滅びていませんね。そう簡単に、この命題「民族の神話を学ばなかった民族は必ず滅びる」という形で、何かを断じることはできないのではないかと。なんかそこを疑問に思うんですが、しかしこれは今、現時点での私の話で、このときに話したものではありません。

佐藤さんに対して、私は、日本の宗教性は決して未熟な始原の状態で止まっているものではない、と。パンテオン、フォッロロマーノを私も訪ねました。しかし、その石の文明のその遺跡の中に佇んで、いろいろ考えましたけれども、やはりギリシャの神々、ローマの神々は死んでしまっている。しかしそれが形を変えてヨーロッパ文明にはなっているわけですけどね。それに対して、日本の延々として祀られて来た、祀りあってきた神々は、われわれの中に生きている、と反論したんです。これは、反論の反論で、シンポジウムの形ですからね。そして私が強調したのは、アニミズムからキリスト教的な、そういうかなり普遍的なものに発展してきたという佐藤さんの指摘に対して、普遍性は評価すべきだ、しかしそれは、ある一面容易であって安易である、そういう判断のしかたはですね。ずっと守られて来た特殊性こそ、さらに守るべき価値があるのではないかと、という反論をしました。日本文明の特徴は柔軟性と持続性にあるのではないかと、という反論をしました。

このトインビーを受けて、若泉先生が、もっと大事な形ということで、トインビー先生に指摘されたことがあります、「Two Loyalty to the Homeland and the World」、生まれ育った祖国への忠誠心と、一体化しつつある人類世界への忠誠心。この二つの忠誠心をいかに調和させるのか。若泉先生は「国際的使命の自覚」をいかに醸成するのか、特に日本の文化・文明を踏まえて、どう醸成していく

のかということ、再度ここで指摘されます。ここでもやはり、デタントがまた冷戦の時代に戻りつつあるという自覚があったものですから、イデオロギー対立を克服するためにわれわれがどうあるべきかということ、それを若泉先生がここでも強調されておりました。

若泉先生は、このシンポジウムの流れ全体を通してあるわけですが、自信と疑念の両方がある。これは、国際政治の現場に立つ人にとっては、誠実に立つ人にとっては当然であったのかもしれませんが。日本の現存、これを若泉先生は“偉大な実験”とっていました。「Japan's “Grand Experiment” and Japanese-American Alliance」。これは、『フォーリン・アフェアーズ』にも論文を発表されている。

一方、そういうふうには日本のあり方を肯定しながら、疑念として、国際社会の基本的ユニットとしての民族国家日本の脆弱性。やはり背景に、憲法の問題とかいろいろな制約があるわけで、国際政治の責任ある立場に自分は立っているという意識が若泉先生にはありましたから、この疑念はつきまとうわけです。本当に日本文化は創造力を内包しているのか、日本の政治体制とそれはどう調和しているのか、というのが常にあるわけですね。このことは、後々触れていきます。しかしやはり希望と願望があるわけで、「全く新しい価値観、秩序原理、学問体系」を創出せねばならない、これを繰り返し若泉先生は指摘されるわけです。

廣岡さん¹⁰がロシア、ソビエトの研究者として「現存するイデオロギー対立の克服」について、「ソ連は、巨大な軍事力を持ち、思想的武器として確固たるイデオロギーを具現し、世界の大国として君臨している。しかし、ソ連の将来も新たな創造的文化を創り出せるか否かにかかっている。巨大な軍事力で興ったモンゴルが文化の戦いで中国に同化されたように、ソ連邦は極めて人工的な秩序であるが故に、自壊の可能性を潜在的に持っているのではないか」、と。今にして思えば、廣岡さんの言われたように、ソビエトはロシアになるわけですが、しかしそれは、ロシアが本来持っていた文化の力でソビエトを同化した、と断定できるようなものではなかったわけですね。1990年、ソ連邦は崩壊しましたが、それはやはり巨大な力を持ったアメリカ、特に経済力の上では比較にならない差があったわけですね。そして、まさにツキディデスの罫です。ソ連邦は負けて行って、ロシアになる。しかしやはり、ロシアという文化の母胎がありましたから、そこに引きつけられたことは事実です。イデオロギー対立は一見消えたかに見えますが、完全に克服されたのではない。文化、宗教の対立と絡み合い、今まさに混迷が続いているわけですね。

それで、いったんこの段階で要約しますと、世界問題研究所のシンポジウムは、第1回のところで二つの面で時代を先取りしていたと思います。ハンチントンの『The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order』、「文明の衝突」。これは、『フォーリン・アフェアーズ』に1992年に発表されて、そのあと本にまとめられて、いろいろな日本語訳も出てきます。その中でハンチントンは、冷戦後、つまりイデオロギー対立のあと、ソビエトが滅びたあと、文化・文明の対立が明らかになり、そ

ここで初めて世界政治は多極化し、多文明化したんだ、と。その主張は、シンポジウムのときに、まさにこの文化・文明の考察が重要だと言っていた、その同じところに行くわけですね。われわれは、日本の文化・文明の独自性ということを論じてきました。そしてハンチントンも、言明しています。日本は独自の文明を持つのか、と。そして、持っているということを断定しています。日本文明は基本的な側面で、他の文明と異なる。対中華文明に対しても、対西洋文明に対しても、独自性を保ってきた、と。もう一つの特徴は、日本の国と日本文明が一致している、と。これは世界の文明には二か国ないしそれ以上の国々が含まれるのに対して、非常に対照的である、と。イギリス、アメリカ、またはカナダ、ニュージーランド等々。中国の場合も、シンガポールをはじめ、そういう国々にまたがっているわけです、中華文明が。しかし日本は違う、というわけですね。この日本文明の特殊性ということのをわれわれは論じてきたということで、やはり時代の先取りをしていたということですね。

第2回シンポジウム（1977年度）のこと

第2回のシンポジウムでは、「文化創造の活力を！」という主題で、三木先生が問題提起をします。源泉としての宗教性。ここでも、宗教的な統一が政治的統一の前に日本の場合があった。その「祀る神と祀られる神」という形ですね。ここの、日本文化の「活力とその持続」というのは、非常に大きいテーマなんですけど、実は私はこのときに参加しておりません。ただ、個別研究はマンハッタン計画と第二次世界大戦中における冷戦の萌芽について、この研究は継続しました。ですが、もう一つ大きい仕事が、産業大学としてあったわけです。荒木俊馬先生に、繰り返し私が言われたことは、産業大学、この場合は理学研究科なんですけれども、ここ産業大学に育った学生から博士を育ててくれ、と。自分の生きている間にそれをやってくれ、ということだったんです。この時代に、一応産業大学は博士課程を持っていたわけです。私が来たときに、同時に博士課程ができるわけです。京都大学とか、大阪大学の名誉教授の方々とかがたくさんおられて、そのおかげで博士課程ができていたわけです。当時は、地方の国立大学には博士課程がないんです。例えば、あの熊本大学でさえ、理学研究科博士課程がなかったんです。私が講義に行っていたりしていたんです。それで、この大学院の問題というのは非常に重要で、今もこれは問題だと私は思います。これは本当にヘビーな仕事、しんどい。授業がずっと学部の授業でも4コマ以上持っていて、それにさらに博士課程、修士から博士課程を持っていた。ただし、これは、非常に私は恵まれていたと思います。ただ、荒木俊馬先生には本当に申し訳なかったんですけれども、先生が亡くなられてしまって、先生がご存命中に博士を育てることはできなかった。これは非常に申し訳なく思っています。ちょっと脱線ですが。

次に「時代の変化」のところです¹¹⁾。荒木先生が1978年7月20日に亡くなられたわけです。柏先生¹²⁾の体制に移行します。時代が、日本の経済が非常に順調で、それに並行して、大学の基盤もしっかりさせるということで、経営優先にはっきり切り替えて行きます。学費も物価スライド制で上げていくよ、ということです。これが教授会の議題として報告されたときにびっくりしたんですけどね。

そのときに、給与も今までと違って上がるよということで、実際にそのとおりにになりました。そして、われわれにとって、教育者、研究者にとって大事なことですが、教養部の改革改組がおこなわれました。柏先生に何度も呼び出されて、理学部に誰それを拾ってくれ、引き取ってくれ、と。そういうことですね。経済学部にも、そういうところにも柏先生が言いやすいところにどんどんそれを押しつけとか、頼むということでしたね。こういう言い方をされました。荒木先生は剛毅だ、豪快だ、と。九十何人の人を教養部に抱えて、これはどういうことだ、と。人間科学部というような形にしよう。皆さん、論文リストを出せ、と。そうすると、出てきたものを見て、柏先生が怒り狂うわけですね。まあちょっとこういう脱線もしておきます。そうすると、組合問題が早速出てくる。あまり詳しいことはカットします。本当に裁判沙汰とか云々ということで、私もずいぶん柏先生に頼み込まれて、何人かの先生の論文を、然るべき論集とかに載せて、論文として形を作ってほしい、と。実際にそういうことをやりました。これも大変時間を取られましたけれども。

そして、「外部」¹³⁾。皆さんはほとんどご存じないと思いますけれども、小浜市が産業大学の工学部、あるいは短期大学をつかってほしい、と。関西電力が何十億円のお金を出す、と。それで賛成する人もたくさんいたわけですね、もちろんね。私は何度も原子炉と原爆について、柏さんと話し合いをしました。広島型の原子爆弾だったら、1,000個ほど入っていますよ、と。少なくともセシウム、放射性同位元素、何かがあったときに、広島で起こったことの1,000倍とか、それ以上のものが出ますよ、と。相当真剣に質問もされました。そこで私は、どうせ工学部をつくるなら、ちゃんとここにつくってほしいし、時代は情報科学とか、生命科学の時代なのに、なぜ原子核、その工学部なのか、と。すると柏先生が言うわけです。君が大学院生を育てた、学位を持たせた。実際にそうなんです。私は5人学位を与えましたけれども、修士だったらもっといっぱいいます。その人たちをどうするのか、と。工学部ができたり、あるいは短期大学ができたら、そこに進めるじゃないか、と。しかしそれはそれで、問題は別なんです。私はこう言いました。柏先生、富山から京都に来るときに、石動^{いするぎ}というところがあるでしょう、石が動くと書く。リアス式海岸で、このところは大変ですよ、地震が起きますよ、と。柏先生は本当に真剣にそれを受け止めてくださって、何年というのは今は思い出せませんが、夏休みで私がイタリアの国際会議から帰ったときに、来てくれというので行きましたら、小浜市への断りの手紙を書いたよというので、巻物にして、見せてくれました。これは、私は先生に本当に感謝しています。もしもあのときに外部に、工学部ができたら、あるいは短期大学ができたら、ここには情報科学とか、生命科学科は、たぶん、少なくとも柏先生の時にはできていなかった。これができたわけですからね。非常に感謝はします。しかし、大学の大きな体制変化でした。世界問題は特に、この「五十年外史」の中で、開放系から閉鎖系になった、という。確かにそのとおりだったと思います。ちょっと大きい脱線をしました。これが第2回のシンポジウムの頃です。

第3回シンポジウム（1978年度）のこと

第3回のシンポジウムは、荒木先生が亡くなったあと、若泉先生が氣力を振り絞って頑張ろうというので、本当に頑張った。「日本の伝統文化」という問題提起ですね。サイデンステッカー先生〔E. G. Seidensticker、米の高名な日本文学研究家〕をお呼びして、討論のリーダーとしては、三木先生がやはり引っ張ってくださった。そして「擁護すべきその特性」、「危機状況の基本認識」、「日本のイグザンプルとは」、それで「総括」ということで、第3回のシンポジウムを行ないました。また時代背景を申しあげますが、ソ連邦がアフガニスタンに侵攻したときです。これが、今に至るイスラム圏の混迷の根になるわけですね。この時代です。

若泉先生が、サイデンステッカー先生を紹介する。「今、世界はひとつの歴史的転換期にある。近代と現代を支配していた西洋文明は行き詰まりにある。日本文化の持つ創造的活力に期待したい。日本文化のよき理解者であるサイデンステッカー教授に、率直な批判とアドバイスをお願いする」。それでサイデンステッカー先生が、問題提起をされたわけです。前2回のシンポジウムを克明にサイデンステッカー先生は読んでおられました。そしてレジュメをつくって、われわれに予め渡してくださったんです。その中でサイデンステッカーさんは、日本、日本文化のトータルな肯定に立つ、自分はそういう立場に立つ。それは皆さんと同じだ。その肯定的な立場で論じ合おう、と。ただしその上で、「偉大な概念」という、そういう表現が前2回のシンポジウムに色々あるんですが、それには、自分は否定的である、疑問を持つ、と。つまりシンポジウムの序論の提起——それは、若泉先生の「全く新しい価値観、秩序原理、学問体系を創ろう」という、若泉先生の意欲の表明ですけれども——これは重すぎる、と言うんですね。それで、新しく創る云々ではなくて、日本文化が内包する価値観を見出し、それを守るべきです、と。これは、実は三木先生の提案、私の楽観論と一致するわけです。それで三木先生の「祀る神と祀られる神」云々は、サイデンステッカー先生もぱっと受け止められているわけですが、ただ、日本文化の固有の倫理性というところでは、世界にも倫理性はあるよ、と。「Ethically directed, ethic oriented」の日本の文化の固有性というのは、それはアメリカの清教徒文化のなかにもあると、マックス・ウェーバーも指摘している、と。

そして、西原さんが繰り返し指摘していたことなんですが、リーダーシップでなくイグザンプル、モデレーターであるべしということ、それを非常に肯定的に自分は取りあげたい、とサイデンステッカー先生はね。彼ははっきり言うんです、政治的には何も無い日本、と。「Not Leader but Moderator」。それでいいじゃないか、それが素晴らしいじゃないか、と。日本のそれは誇るべきところではないか、というのがサイデンステッカーさんです。英雄なき日本。もうペシミズムは越えましょう、と。実際に若泉先生のこの論文ですね、「Grand Experiment」、これはまさに、そういう立場で、肯定的に語っているではないか、というわけです。

そしてここで、サイデンステッカー先生が指摘されたんですが、経済的には、日本はあまりにも強

すぎる、と。私たちはそれをあまり意識していなかったんです、実は。1970年代後半から1980年代初めですね。まさにこのツキディデスの罫。アメリカにとっては大変だ、と。これはもうつぶしにいかざるを得ない。つぶしに行きますよ、という。実際にそのとおりになるわけですね。日本に対してアメリカがものすごいバッシングをしてきて、日本円が大変なことになりました。日本もいろんなところがつぶれていくようなことに、やがてなるわけですが、この点をサイデステッカー先生は明言しておりました。あまりにも強すぎるよ、その自覚がなかったら大変ですよ、と。

それで本題に帰って、サイデステッカーさんは文学の研究者ですから、日本の文化の固有質としての、自然との融和性について、とくに大和言葉が自然との融和的対話に適した言葉であるという私の意見に同意して、サイデステッカー先生が、それに関する体験談をいろいろ話されたわけです。ライフワークである『源氏物語』の翻訳で、どんなに苦労したか。その苦労の一番のポイントは自然描写であった、と。皆さん、『源氏物語』を読もうとしたことがありますか、読めた人はおられますか、と言われました。読もうと私〔曾我見〕はしましたが、何度も挫折しました。サイデステッカーさんが指摘するのは、本当に連続的に絶え間なく自然描写が続く。そのとおりなんです。皆さんご存じないですか。英米文学にはこれはありえない。『源氏物語』のなかで、唯一自然描写が途絶えた部分がある、と。それは、光源氏と藤壺宮の逢瀬、最もメインなテーマの部分ですね。ここであって、その重要性がそれで引き立たされているんだ、と。自分はそれを発見した、というわけですね。これがいついつおこなわれたということが書かれたらもちろん駄目なわけです。生まれた天皇の正当性ということが問題になるわけですから、当然そこで自然描写を打ち切るわけですね、紫式部は。

言葉は社会を反映する、自然との融和は日本文化と社会の特質である、と。私と三木さんの指摘を肯定的にサイデステッカー先生は受け取られたわけです。「日本的エトス」を情緒的知性、知情相半ばする知性というような表現を私はしたんです、非常に未熟な言葉ですが、三木先生は哲学者ですから、きちっとした言葉で述べられたわけです。日本では哲学というよりは、哲学を内包しながら、それが物語という形式によって表された云々、と。この二つの点をサイデステッカー先生は取りあげて、日本人の知性は、分析的観念的なところではなく情緒的なところにあり、「物語として表された」ところにあり、それが力になっている、と。それで、あとで触れたいと思うんですけども、たしかに分析的観念的でなく情緒的です。情緒的ですけども、僕は分析的観念的でもあると思うんです。知情相半ばする知性の中には、分析力も観念的な論証する力もあると思うんです。これはあとで、物理学のイグザンプルを挙げて、皆さんに判断してもらいたいと思います。この点を若泉先生に理解してもらいたかったですけれども、十分にお話しできなかったのが残念なんです。でも、このサイデステッカー先生が言う分析的観念的なところではなく情緒的なところ、「物語として表された」ところにあるというのは、それはそれで、僕は、プラスアルファはあると思うんですよ。それはまたあとで触れることにします。

それで、受け継がれる固有の質、自然との融和、自然への没入。これは、他の文化（文学）にない特質である。もう万葉の時代で、万葉は世界で最も古い詩集だと思いますけれども、例えば山上憶良の、秋の野の花を読む歌、「萩の花 尾花 葛花 撫子の花 女郎花 また藤袴 朝顔の花」、この和歌の形式ですね、これが伝承され発展する。和歌として、俳句として。それが大衆に受け継がれて、大衆の文化なわけです。大学の先生が偉そうに言っている話とは違うし、文学者がわが文学というので独り占めする、そういうものでもない。それは、日本の文化全体に引き継がれているものである。

それで、また苦労話があるわけです。川端康成がノーベル賞受賞の講演をするときに、明恵上人のあの和歌が引用されます。「あかあかや あかあかあかや あかあかや あかあかあかや あかあかやつき」。これを話すというので、サイデステッカーさんは川端康成から渡されて、困った。しかし、必死になって訳したんですね。「Seeing the moon, he becomes the moon, the moon seen by him becomes him. He sinks into nature, becomes one with nature,,,」,「月を見ながら彼は月となり、彼に見られた月は彼となる。彼は自然に没入し、自然と同一化する」。まあ、こういう形でしか、明恵上人の歌を、欧米の言葉にというか、その文化を持つ人に伝えられないわけですね。サイデステッカー先生はしみじみと語られた。サイデステッカー先生自身は、これはもちろんよく身に沁みてわかるわけですね。明恵上人が梅尾の高山寺でまさに自然の中に没入している、こういう姿。この絵も¹⁴⁾、サイデステッカーはご存じです。皆さんどうか、すぐ近くですからね。神護寺のもう一つ奥に、高山寺があります。鳥獣戯画があったところですよ。鳥獣戯画も、いかに日本の文化が、日本人が自然を愛するか、自然と一体になろうとしているかを、本当に典型的に表している。世界にないものですね。日本人は、案外日本の文化を疎かにするんですけれども、私は散歩しながら、サイデステッカー先生をだいぶん独り占めにしましたけれども、先生はしみじみと語られていました。

そして、シンポジウムの中で私は、やはり気になることがあって、サイデステッカー先生に尋ねたんです。日本文化、日本人の心性、自意識の脆弱性、対象に同化する傾向が余りに強い。そこに自我の欠落というような側面があって、個人レベルではひ弱さということですが、それが日本文化の特徴というか、病理的なところであるとすると大変気になるのですが、どう思われるのか、と。この和泉式部、これも京都ですね。「ものもえば 川の蛭は 我が身より あくがれ出る 霊かとぞ見る¹⁵⁾」。この段階での和泉式部の「あくがれ出る霊」、これは、恋多き和泉式部の、その恋する人への思いというような側面もあるわけですね。やがて例えば、和泉式部が彰子とともに、姫路城の奥ですけれども、非常に有名な上人がおられて、そこに、大変なところなんです、訪ねていったときに、上人の名前はちょっと思い出せませんが、会ってもらえない。そのときに和泉式部が「暗きより 暗き道にぞ 入りぬべき はるかに照らせ 山の端の月」という歌を歌って渡すわけですね。すると上人が、慌てて会ってくれた、という。そのときは、もう老いを自覚した和泉式部なわけです。救いを求めていた和泉式部です。先の歌とは随分違うわけですけれども、しかしいざれにしろ、自然の中に

自分を没入させていく。これは、日本文化にずっとつながっていくわけですね。川端康成の文学なんかでもそうです。川端康成自身は、日本から滅びてゆく「もののあはれ」に殉じたい、と。実際に彼は自殺してしまうわけです。要するに、「もののあはれ」という、そういう死生観に対する杞憂を私は伝えたんですが、サイデンステッカー先生は平然として、「現代というものは、自我意識にあると言われたことがあります、本当でしょうかね。かえって日本の力の強さは、そういう意識があまり強くないというところにあるのではないか」、と言われたんです。しかし、やはり私は今でも気になります。特に、サイデンステッカーは弱さも含めた日本文化のトータルな肯定をする、自我意識がないところにむしろ期待したい、と。それこそリーダーを目指すのではなくて、モデレーターであるべきだ、と言うんですけどね。

そこで再度、イグザンプルとして存在することの価値、西原さんが指摘したこと、その価値をサイデンステッカー先生は、再度指摘される。それに対して湯川さん¹⁶⁾は、イグザンプルであるためにも、外に向かう日本文化、日本文明の位置づけがなされなければならない。その自意識がない、と。良さ云々だけでなく、さらに考えを深めなければならない、という。それに対してサイデンステッカーさんは、皆さんはそうやって真面目すぎる、と。そこが「日本人業」の難しさなのかもしれないけれども、やはりリーダーを目指すべきではなくてモデレーターであるべきである、日本のありのままの日本文化に期待するんだ、ということを繰り返されていました。それでも私は、今の時点で思うのは、このコロナ禍の時代を生き抜くためには、やはり強い意志力が必要である、と。やはり湯川さんが言うんですけど、日本人の良さ、自意識が薄いところが日本人の良さなんていうことだけではすまない、という思いはあります。

シンポジウムの総括と個人研究について

さてそれで、もう一度ハンチントンに戻りたいと思います。この3回にわたる世界問題研究所のシンポジウムは、時代を先取りしていたと思います。シンポジウムの開催は、1970年代後半ですね。ハンチントンが1992年、だから1990年代前半に論文を書き、そこで日本については、リーダーではなくてモデレーターであるべきということを行っている。そのときに、これは日本語訳が出たときの序文に、ハンチントンが明言しているんですけども、日本は、今までも世界の支配的な力と手を結んできた、明治以降ですね。そして今後の問題も含めて——1997～1998年に翻訳が出たと思いますけれども——「アメリカを世界の覇権国として、そして中国が大国として発展すれば中国を東アジアの覇権国として、処遇しなければならない。これを上手にやっつけられるか否かが、東アジアと世界の平和を維持するうえで決定的要因となる」。ハンチントンはこういうことを言っているんです。サイデンステッカーさんの指摘と合うんですね。やはりこれは、あらためてこのことを思うと、今現在、そういう状況に来ていますよね。中国は大国と化していて、大国としてわれわれは処遇しなければならない。そのときに、国家としてモデレーターであるということ、これが大変に難しい。それは、個

人として、われわれ日本人というのはそういうものだという風な見方であればそうかもしれませんけれども、国家としての、つまり「日本人業」という、国家としての日本人、日本国家業は、そこに難しさがある。これこそ、米中対立の混迷と、その後さらに来るであろう多極化をどう分析し、日本の政治に対してどうアドバイスするというか、政治レベルまでその研究の成果を持っていく、それは研究者に課せられた課題だと、私は思います。難しいでしょうけどね。これで、一応シンポジウムのことを終えます。これで私は1時間15分しゃべっているんですかね。もうちょっとで終わりにします。

それで、共同研究を踏まえた個別研究も行なわれていました。私自身は、確かに危機意識を持ちました。それで、マンハッタン計画から第二次世界大戦での大同盟、そしてその崩壊についての考察をおこないました¹⁷⁾。大変に忙しい時期で、若かったからやれたんですけども、月曜日から土曜日までもちろん学校にいました。皆さんは、私は非常にうらやましいんですね、皆さんはよくやると思います、よう学校に来ないで。これ皮肉ですよ。私は月曜日から土曜日の午後まで、そして土曜日の午後と日曜日も、専ら研究。もちろん月曜日から土曜日の午後まで、大学院生と共同でやっていました。教育と、研究と、大学の業務というのは、本当に忙しかったです。その間に、ソ連邦のアフガニスタン侵攻がありました。このアフガニスタン侵攻、ソビエトの軍を導き入れたのは、アフガニスタンの共産党であって、その中心人物は物理学者なんですよ。それを知っていますから、何とあほなことを、という思いがした。しかしアフガニスタンの共産党とか、その物理学者があほであっても、ソビエトが動かなきゃよかったんですが、それが入っていったんです。これが今のイスラムの混迷を本当に引き起こしたんです。私は、それがイスラムの混迷を引き起こすというような、そういう洞察は当時できませんから、また冷戦に行ってしまうという恐れを感じつつ、この文章をまとめたんです。

佐藤先生が、先ほどもありましたが、自然意識について書かれた¹⁸⁾。佐藤先生は、このあと副学長もやり、世界問題研究所の所長もやられましたし、大変お忙しい中で、歳を取って60歳の後半で、これをベースにして学位論文を書きます。学位を取ります。ロマーノさん¹⁹⁾が「西洋文明の危機と日本」という論文を書く²⁰⁾。真面目な湯川先生が「新国際秩序・技術開発・人間主義」²¹⁾、これは、皆さんが掲げているテーマにもつながる。湯川先生はこういう論文を書かれました。

若泉先生の疑問に答える ― 湯川理論を例として

それでここから、ちょっと肩の力を緩めながら、若泉先生に対する、若泉先生の疑問に答えるという形で、話をしたいと思います。若泉先生は真面目なんですよ。国際政治の現場に立った方です。そして、沖繩返還の、あのキッシンジャーとの交渉を、成功裏に達成させた方で、素晴らしい成果を挙げられた先生です。その先生が引退。あとになって分かった、先生がお別れに来てくださったんだというのは、あとになって分かったんです。日本の科学水準は本当に世界の水準にあるんですか、湯川理論というのはどうなんです、湯川の予言した中間子は素粒子なんです、と。誰かに何か言われたんでしょうけどね。そしてさらに、日本の文化に本当に創造性があるんですかという、そういう質

問を、最後に私に向けられた。それなりの返事はしたんですけども、もっと時間を使って話をしてあげば、と思うんです。

それで今ここでお答えしたいんです。科学の評価というのは、自然科学というのは客観的な、本当に客観的なものだという思いがあるかもしれません。とんでもないんで、評価も時代とともに変化します。実際に変化する様子を見ていただきたいと思います。若泉先生が疑問に思っていたことに対する私の答えが正しいかどうか、日本の科学は世界をリードしていましたし、今でも私はリードしていると思いますが、それはこれからの話で判断してください。

それで、皆さんにチラッと物理学入門です。ああ、そうなんか、というふうに感じてもらえたらいい。これからお話するのは、〔京都市に頼まれた講演を基に、〕中学生、小学校のよくできる5年生、6年生も出てくださいというので来ていましたけれども、もっと柔らかい部分の、これが骨格の部分です。その骨格の部分をお見せします、湯川理論ってなんだというのでね。そんなもんか、と思ってもらえば結構です。

湯川先生が研究を始めた1930年代、その頃には、素粒子というのは5種類だったんです。光の素粒子 γ と書きます。そして電子 electron、陽子 proton。そして、1931年、1932年という段階に存在が確認された、うすうす予想されていたわけですが、確認されたものとして、neutron、中性子というのがあります。そして、わけのわからん存在というので、ニュートリノというものを認めざるを得ないという状況でした。この陽子と中性子から原子核はできています。原子核は、陽子と中性子が固まったものです〔図1参照〕。

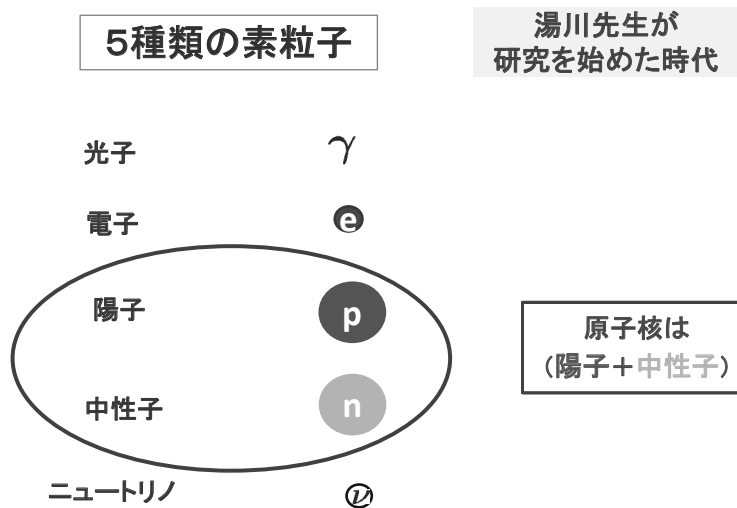


図1

それで、原子って何か。おおよそこういうイメージが皆さんあると思うのですが、電子がマイナスの電気を帯びて、原子核のその外側にあって、原子核がプラスの電気を帯びて真ん中にある、と〔図2参照〕。そして、このプラスの電気とマイナスの電気、そこに引力が働いて、電磁相互作用。これもきちんと数式に乗せてきちんとやったら、もう大変で、矛盾がいっぱい、疑問が出てきますけれども、ほんわかと考えてください。プラスとマイナスで引き合っていると考えてください。真ん中に原子核がぎゅっと小さく固まっていて、その固める作用があって、強い作用、核力とも、強い相互作用とも呼ばれるんですけども、それは、電磁相互作用とは別個にあるんだろう、と。そういう予想がなされていた時代です。

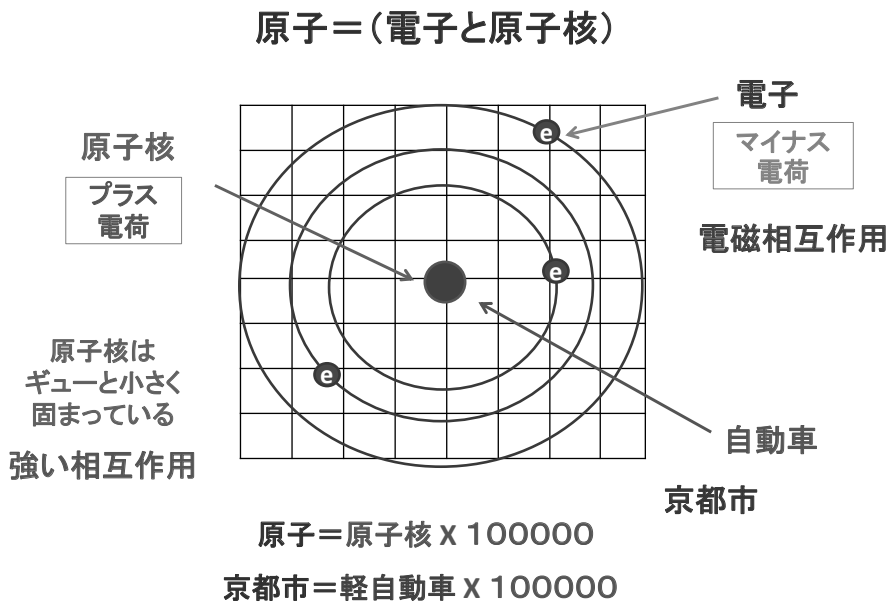


図2

そこで、原子核はどこまで小さいかという、原子核を10万倍したらだいたい原子です。つまり、原子の10万分の1です。イメージとして、京都市全体と軽自動車。軽自動車を10万倍ぐらいすれば京都市になる。数メートルですよ、軽自動車というのは。それを1,000倍するとキロになって、それをまた10倍にすると、何十キロになります。10万倍ぐらい。そうすると、相当自動車は小さい。京都市のスケールからすると、非常に小さいですね。京都市全体、その辺りまで原子が広がっているとしたら、原子核のほうは、高島屋辺りにある自動車ぐらい。それだけぎゅっと固まっているわけです。それほど強い力で固められているに違いない。それはなんじゃろう、ということです。

もう一つ稀な現象ですが、原子核が別の原子核に変わっちゃうんです。弱い稀な現象です。それを

調べたのがフェルミ〔Enrico Fermi〕という方ですけども、彼は中性子が電子と陽子になって、電子とニュートリノ、これは反ニュートリノと言うんですけども、それになるんだろう、と。そして、中性子が来て、陽子と電子、ニュートリノになる。こういう考え、それで理論体系をつくる。これを弱い相互作用と言うんです〔図3参照〕。

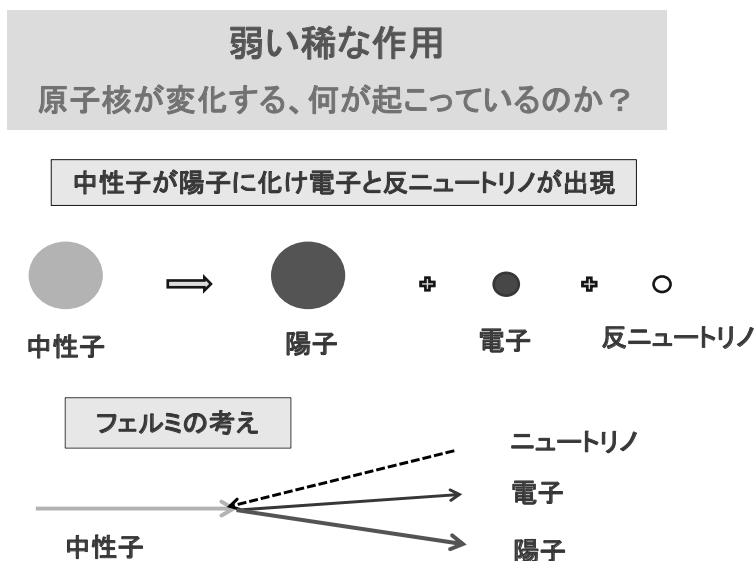


図3

それで湯川先生は、強い相互作用の問題と、弱い相互作用の問題を、個々の問題ではなくて、一気に解決しよう、寄せ集めて、寄せ集めることで解決できないか、と。「On the Interaction of Elementary Particles I」〔という論文がその成果です〕。これが悪い癖で、先生は必ず一所懸命考えて論文を書くと、Iと書くんですね。なかなかIIは出ない。うーん、これからやるぞ、と言うのでIです。これでノーベル賞を取るんです。どういうふうにするかという、強い作用と弱い作用、その両方を媒介する場があって、電磁場のような場があって、電磁場に光の素粒子、光子が付随するように、その場に新しい素粒子が付随するんだ、と〔図4参照〕。それが後々湯川の π 中間子と呼ばれるようになるものです。論文の中ではもちろんその中間子なんて呼ばないわけですけども、後々中間子というふうに呼ばれるのは、この粒子の質量が、陽子の質量と電子の質量のちょうど中間にあるので中間子と呼ばれるわけです。それで、この論文、先生は書いたものを全部残しているの、そのここに $2 \times 10^2 \text{ electron mass}$ とあります。電子の質量の200倍ぐらいの粒子が、その場には付随するんだ、と。それで、これですね、この原稿ですね。その頃は、今のようにコンピューターではなくて、ぼつぼつと秘書がタイプでまとめるわけです。〔この写真 — 不掲載 — 〕若いですね。

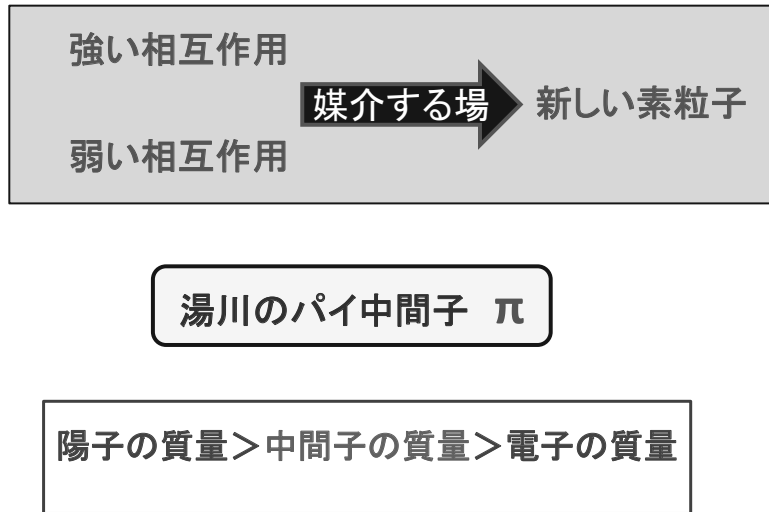


図 4

湯川がその中間子を予言したわけですが、1935年〔図5参照〕。元々の〔図1〕に比べて、3種類素粒子が増えます。この頃、ボーア〔Niels Bohr〕が日本にやってくるんですけども、大反対です。なんか増やしたらいいもんじゃないぞ、と言うんです。ところがさにあらず。ここで湯川のを考え方をまとめますね〔図6参照〕。フェルミは、中性子がやってきて、それが陽子と、電子と、ニュートリノに割れますよ、と。そして湯川はこうです。中性子がやってきました、それが陽子と π 中間子、このマイナス〔の符号が付いた粒子〕、陽子はプラスの電荷を帯び、中性子は電気を帯びていません。その中性子がプラスの電気を帯びた陽子と、マイナスの電荷を帯びた粒子とに割れて、その粒子が電子とニュートリノに壊れる、と。つまり、この一点、ここで弱い相互作用が行なわれるのに対して、中性子が陽子になって、 π 中間子になる。これは強い相互作用。この粒子が電子とニュートリノに壊れるのが弱いんだ、と。ここに「間を取り持つ存在」がある。これが、非常に日本的な、まさにモデレーターのな、「間を取り持つ」というのが日本人はやっぱり好きなんですよ。間を取り持たないといかん文化なんです。それで、強い相互作用というのが、陽子が中性子になったり、中性子が陽子になったり、頻繁に行なわれる強い作用です。それがそのおかげで陽子とか、中性子がぎゅっと原子の10万分の1ぐらいに固められるような強い作用です。弱い相互作用は、この π が電子とニュートリノに壊れるところ。これが非常に稀に起こる。こういう形で統一をしようということですね〔図7参照〕。

湯川が予言した中間子

1935年

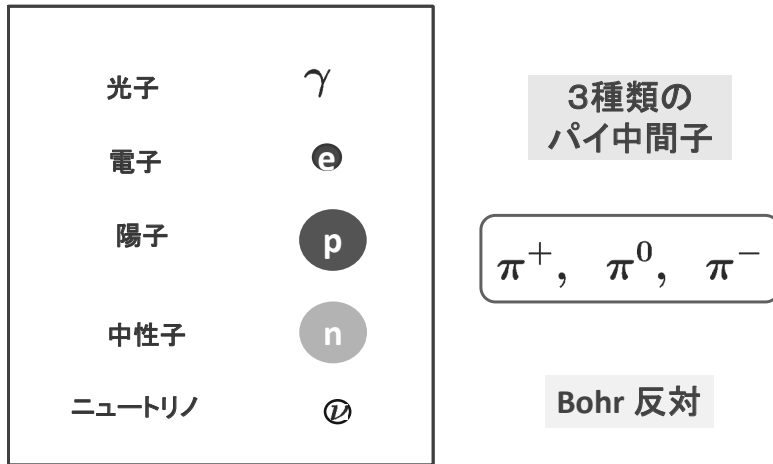


図 5

弱い相互作用

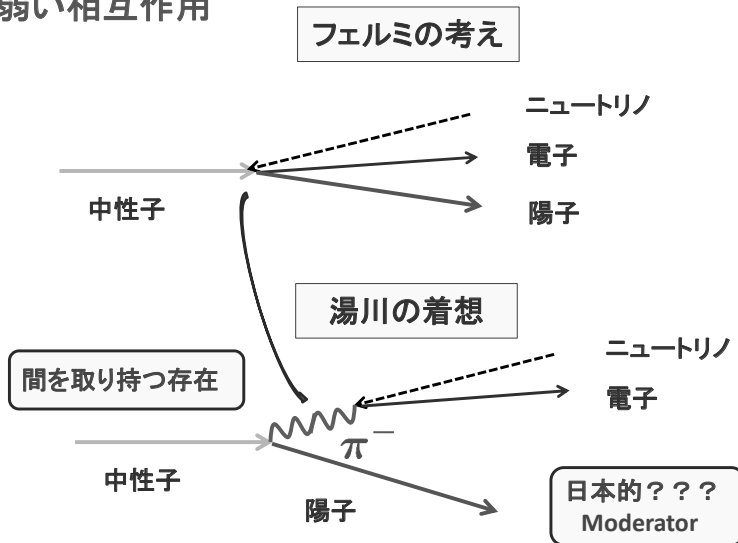
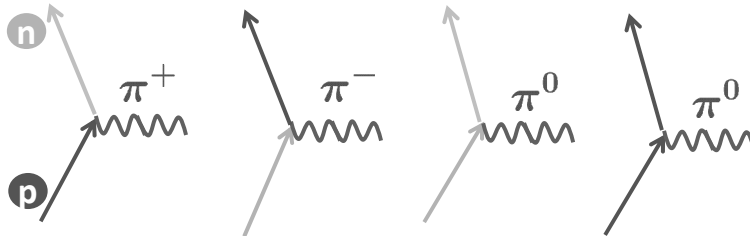


図 6

湯川の統一理論

強い相互作用



弱い相互作用

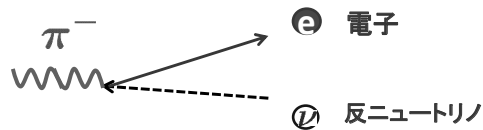


図 7

その、湯川先生の予言が 1935 年。するともう翌年から翌々年にかけて、アンダーソン [Carl David Anderson] という、その当時の最高の実験家が、宇宙線の中でこれを発見します。した、と思う。した、と発表するんです。もう大喜びだったんです。しかし、よく考えてみると、そんなに簡単に地上の実験で、強い相互作用をするそういう湯川の粒子が見つかるのか、と。宇宙の上空から何らかの形で湯川の素粒子ができた、と。しかし生成したとして、大気層を抜けてくるのに、空気中にはいろんな原子があるわけですから、それと強い相互作用をしたら、地上までいったいやってくるのか、と。しかも湯川が予言した電子の 200 倍に比べると、もっと質量が小さいんです、ずっと調べていくと。

それで、10 年間、1937 年ぐらいに発見、発見と言われてから 1947 年ぐらいまで、混乱が続きます。それですます湯川理論は有名になるんです。やがて湯川の理論が予言した粒子と、アンダーソンが見つけた粒子とが違うということがやがて分かります。実は、招かれざる粒子 μ というのが介在するということが実験で確かめられるんです。湯川先生が研究を始めた頃は、とてもこんなものがあると、どういふふうにも考えてもそれは、こういうものが存在するという着想は、できない。しかしそういうものが実はある。招かれざる粒子。実は、この粒子は今も謎です。最近、ここ数十年、素粒子論のまとめる、最も優れた理論体系、標準、われわれは模型と言いますが、理論と言わずまでも模型とまでは言っていますけれども、標準模型、それがひょっとしたら潰れるかもしれないというので、またこの μ 粒子の性質の研究が、今ここ数カ月でまた脚光を浴びています。そういう粒子を、アンダーソンが発見したんです。湯川の粒子だとアンダーソンも思ったわけです。

この実験が、ブラジルとイギリスの実験グループによってアンデス山脈でおこなわれます。1947年です。アンデス山脈の上空で、宇宙線がやってきて、 π 中間子が崩壊して、この招かれざる客、 μ 粒子が出て、それが電子に食われる。この証拠を掴んだんです。写真乾板、写真のネガのフィルムがありますよね。それを分厚くしたような写真乾板を、アンデス山脈に持ち上げます。そうすると宇宙線がやってきて、 π 中間子ができて、 μ に崩壊して、それが電子に崩壊した。この痕跡を見つめます。この写真が、湯川先生の研究室に、先生がいつも座られる後ろのところに飾られていました。うれしかったらうなと思うんですけどね。ここに π 中間子が右から来て、ここでニュートリノというのを出して、これは電気を帯びていませんが、ここで消えちゃう。見えないんですけども。そして、 μ 粒子というふうになります。こちらのほうはもっと詳しく、 π 中間子がこちらから来て、 μ 粒子になります。これが μ 粒子なんですけど、 μ 粒子がここを走って、そして電子に食われて、ここでもニュートリノが出ます。これ〔図9の写真〕が湯川先生のところに、額に入れてずっと飾られていました。ニュートリノは見えないんですがね。以上がラッテス〔Cesare Lattes〕その他の、イギリスとブラジルの研究者グループ〔の仕事です。図8、図9参照〕。

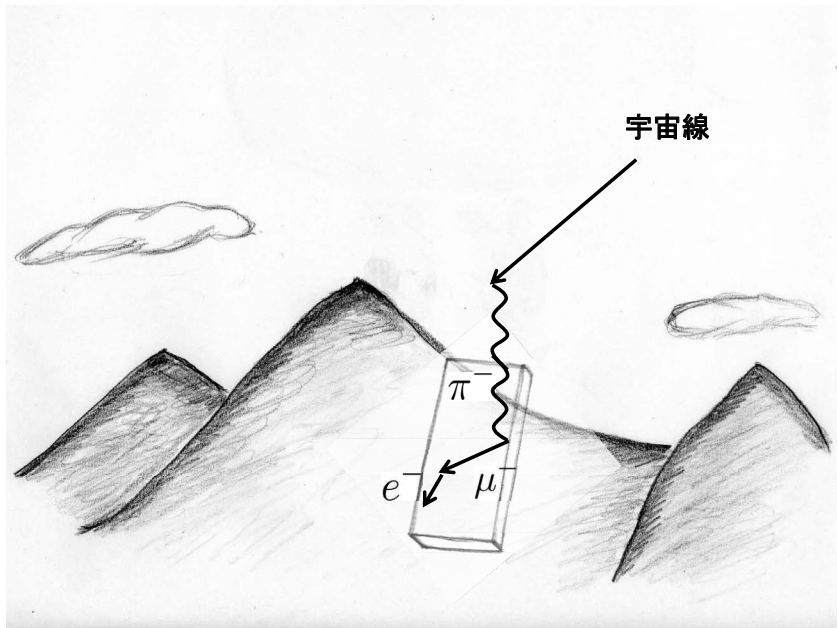


図8

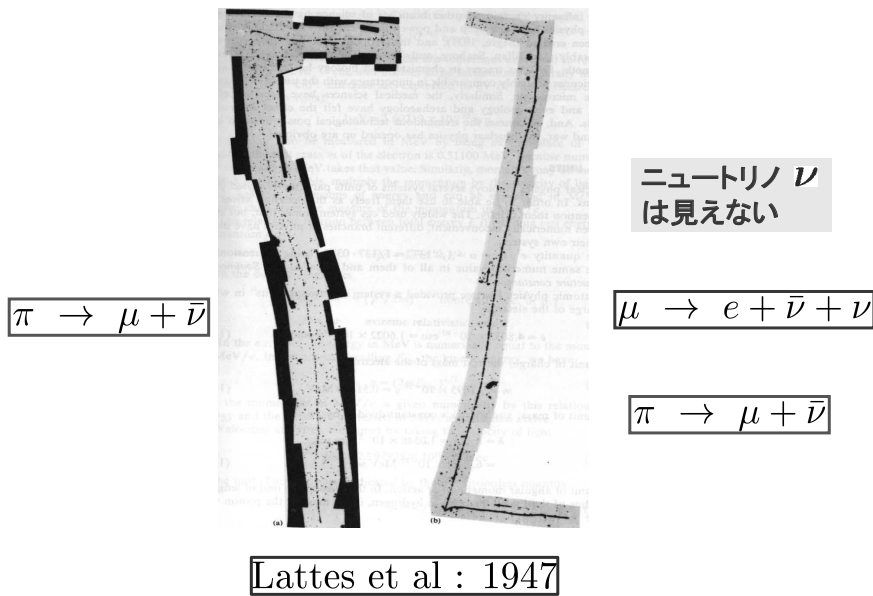


図 9

湯川理論は正しかったんです。それでノーベル賞をもらうことになり、そして、それを基に、さらに宇宙線の物理学が発展するし、加速器物理学が発展します。それで物理学がものすごい大所帯になってくるんですけども、しかし実験をやればやるほど、 π 中間子はもうどこか片隅に追いやられるぐらいに新しい粒子がどんどん発見されるんです。 π 中間子の仲間のようなものがいっぱい。そうになると、そんなのは素粒子かという問題が出てきます。しかも、そういう現象を記述しようとする理論、場の理論というのがあるわけですけども、それで計算をすると、計算結果が全部 ∞ （無限大）になります。湯川先生は、喜びのあとにも二重の苦しみで、悩みに悩んで、新しい理論を創ろうというので、ことごとく失敗して、失敗した揚げ句に、私が大学院に入ります。私は、湯川研究所の小講義室に座らせられて、後ろに助教授とか講師とか、皆さん私の先輩たちがざっと並んで、湯川先生が講義して。「おまえは生け贄じゃ」と先輩に言われました。これは大迷惑。というのは、私は湯川先生と考え方が半分は合うんですけども、半分は違ったので、それで逃走します。逃走して、産業大学に来たんですよ。

素粒子論は転換期にあった。当時あった場の理論、局所場理論、Local field theory と言うんですが、それで計算したら ∞ （無限大）になっちゃう。なんとかしなきゃならん。それを解決しようとしたのが、朝永〔朝永振一郎〕の繰込み理論です。それは、これも妥協の産物というか、モデレーターもいところの理論なんです。たくさん素粒子が見つかる。分類学が発展する。zoology ですね。この粒子とこの粒子は似ている、こうこうだというので、zoology。動物学とか、動物園学というか。これ

はとても素粒子ではなくて、真の素粒子が〔別に〕あるんだというので、湯川理論から遅れることはほぼ30年のちに、ゲルマン〔Murray Gell-Mann〕がクォーク仮説を創る。私が大学院に入った修士の頃に、ちょうどこの着想でこういう研究を始めたところだったので、湯川先生に引っ張り込まれたら困る。朝永先生のこの「繰込み」に、私は有望であるという思いを持っていましたので。結局しかし湯川先生とは6年ぐらい付き合うんですけれども、一所懸命逃げようとしていました。

ゲルマンが、結局1963年から1964年にかけて〔クォーク仮説を〕提唱します。〔ゲルマンと一緒に写ったスナップ写真を示しながら〕ゲルマン先生の80歳の誕生日に、誕生日祝いをやろうと言いながら2年ぐらい遅れましたが、しかし2010年にシンガポールで誕生会をやりました。50人ぐらいが集まって、日本からも2人、私ももう一人が行きました。ゲルマンとよからぬ話をしていたら、ばちっと写真を、日本から行った私の後輩が撮って、あとでくれたんです。ゲルマンが、あいつは誰や、と。おまえは京都だけど、あいつは東京や名古屋の奴と違うのかと言うから、そうだと言ったら、ああいうやつは嫌いだ、と。彼は、京都は好きだけれども、名古屋とか、東京は嫌いだ、と。ゲルマン先生は、豪快な先生でした。

それで、原子核は陽子と中性子からできた複合系なんですね。例えば、ヘリウム原子というのは、陽子2個と中性子1個からできている。三重水素核というのは、中性子2つと陽子1つ。ところが〔ゲルマンのクォーク仮説によって— 図10参照〕、この陽子と中性子が今度は複合粒子になったわけです。陽子がゲルマンの言うクォークu、uとdから、つまりuが2つとdが1つからでき、中性子がd2つとu1つの複合からできる。だから、クォークから陽子や中性子ができて、陽子や中性子から原子核ができていくわけです。

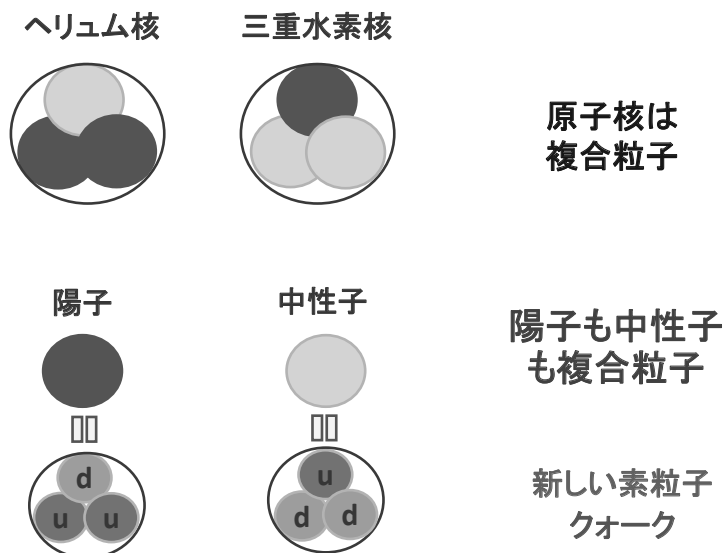


図 10

湯川先生はこの〔前〕段階です、中性子や陽子を結びつけて原子核をつくろうというので、 π 中間子の存在を予想したわけですね。そしてその湯川が提案した π 中間子ですね、この図〔11〕も、時間が右から左へ流れると見たらいいんですけども、**u**クォークと反**d**クォーク — と言うんですけども —、**d**クォークと反**u**クォークから π 中間子というのができて、 π 中間子はもはや素粒子ではなく、複合粒子になっちゃったんです。

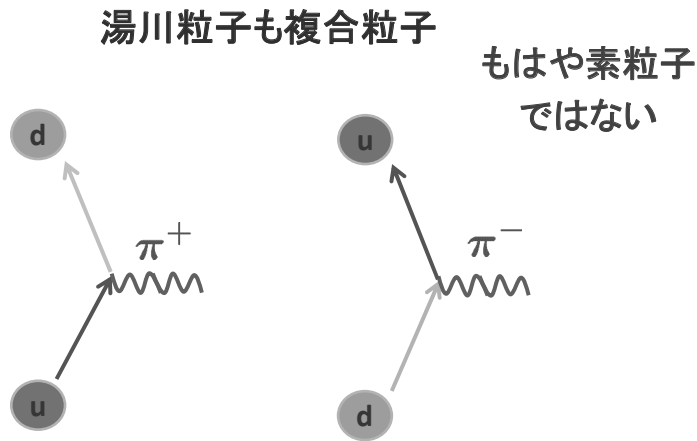


図 11

こういうふうな時代とともに、自然科学は変化していきます。真剣にその段階で英知を絞って出来上がって、もうこれで consistent〔無矛盾〕だろうと思うと、どっこい限界が見えて、そしてさらに進むと、階段を上がっていくと、また限界が来る。これを繰り返していきます。科学は、その時点、時点で仮説を立てて、それを検証していく。検証してそれが実証されたときに、新しい理論体系、新しいまとまりができた。階段を上がって踊り場にきた。しかしそれはあくまで踊り場であって、まだ階段が続く。仮説を立てて、実証して行って、ということを繰り返しているわけです。ここまではちょっと脱線しました。

そこで若泉先生の疑問に戻って、日本の科学は世界の水準にあるのか、日本文化は創造力を持っているのか、それについてですけども、例えば湯川の中間子論は、今例に取って話をしましたように、原子核物理学を完成させようとしたんです。しかしそれを超えて、新たな素粒子の物理学が切り開かれたわけですね。学問自体がばーんと大きくなった。それはもちろん世界の水準を凌駕するようなものだったわけです。そして、その段階で場の理論が抱えてきた困難を、朝永先生が克服しようとして、繰込み理論、これも世界の最先端です。朝永先生を筆頭に、ファインマン〔Richard Feynman〕とシュビンガー〔Julian Schwinger〕がそれを完成させて、「朝永＝シュビンガー＝ファインマンの理

論」ということになるわけですね。さらに時代は下りますけれども、南部先生〔南部陽一郎〕の“Spontaneous Breakdown of Symmetry”〔対称性の自発的破れ〕という理論というか、考えが提唱されます。これも、この対称性というのが、鋭角的な結晶の対称性という、西欧文明に出てくるような対称性とは違う、いかにも日本的な対称性です。その破れ、それは、自然現象、宇宙の進化を説明する上でも大事です。

それで、私は、〔日本の科学が〕創造的であるし、しかも非常に日本的である、と思います。これが私の見解なんですね。日本の科学は、世界の水準にあったし、今もあるし、強靱な創造力を持つと思われま。ただ、危惧するところはありますね。団塊の世代ですね。ちょうど受験競争が激しくなり、受験エリート校ができて、そのあと団塊の世代の人たちはそういうところで文化的でないことを学んだ。非常におそらく文学を語るような人は、ほとんど少ない。これは日本の文化のなかで、ちょっと異端というか、異常な事態が、団塊の世代ではありますよね。そのあとは、またまともなところに帰るんですけど、そこに危惧があります。それ以外は、やっぱり日本人は、皆さんまた元の日本人に帰ってきたんだと思いますよ。

これで、バトンを司会者にいったんお戻しします。1時間半を超えてしゃべりましたので。それで何か、ここの部分は確かめたいということがありましたら、ぜひ。そのあとまた続きというかたちにします。

第三部 質疑応答

司会（耳野健二）：ありがとうございます。では、ここまでのところで、何かご質問などおありでしたら、承ります。はいどうぞ。森先生。

森哲郎：私よりもほかの方が質問されたほうが良いと思いますけれども、ただ、私は今日のお話は、非常に感銘深く、世界問題研究所にいましたけれども、私があるより前の、しかも非常に本格的なレベルの話を受けて、本当にびっくりいたしました。ある意味で、今聞いたレベルまでもう一回立ち戻るだけでも、物理はともかく、文化の領域においても大変なことなんじゃないかなということを感じました。そんな意味で言いますと、先生のお答えとして日本文化の創造性というか、そこについては、何か文化的でない〔？〕日本人というか、マル・バツ式のほうをずっと生きてきたような、そんな気がして。例えば弱さと強さが一つであるみたいな話も、哲学だと弁証法的な理論でごまかしてしまいますけれども、そうじゃなくて、物理なんかの場合は、もっと厳密な理論立てをするんだと思うんですね。それが日本文化のところでもまた重なって、——物理のことを知らないのに分かったような気持ちになるのはいけないのかもしれませんが——非常に印象深く創造性というか、そういう話を聞きました。しかし同時にその裏側では、現実としては、先生が指摘されたある種の

強靱な、いわば自覚というか、自我というか、自己というか、そこが非常に欠けていくという、そのことも非常に感銘深く聞きました。まさにずっと自分の問題としてきたことが、もうそんなに早くから実は説かれていたんだというので、すごく驚愕というか、驚きを感じています。あらためてもう一回勉強し直さなきゃいけないということを、強く感銘深く思わされました。本当に先生、どうもありがとうございました。

曾我見郁夫：はい、どうも。私は、三木先生にも——まだお元気で東京におられるはずなんですよね——、ぜひ三木先生にもね、来ていただいてね……。このシンポジウムの3回、問題提起をずっと三木先生はなされたんですよ。このシンポジウムを離れても、私も議論をして、最後は、若泉先生が去っていくときに、なんで若泉先生をもっと助けてくれなかったんだということで、三木先生に当たったというか、そういうことがあって……。三木先生に、本当に申し訳なく思うんですけども。ずっと深く考え続けられたんですね、三木先生はね。若泉先生と話し合っただけで〔研究所を〕引っ張ってくださった。本当にありがたいと、私はいまだに思いますね。

司会：ありがとうございます。ほかにどなたかおられますか。どうしましょう。特にご質問がないようですので、続けますか。

研究所の今後を語る

曾我見：そしたら続きを、第二部ということで。今後、世界問題研究所がどうあってほしいかということについて、時間を本当はもっと使って考えるべきだったんですけども、人文・社会科学と理工学の共同研究の可能性ですね。それで、新しいテーマとして、この「科学技術の発展と人類社会の変化」を掲げられたわけですが、逆に私が皆さんにその心を問いたいわけです。今はAIの時代、ビッグデータの時代と言われて、この理工学系統が達成してきた社会の大きい変化ですね、そこをどう人文科学、社会科学の皆さんが受け止めて、どう融合していくかですが、お互いどう手を結ぶかなんですが、やっぱり自らどう変わっていくのか。この変容という文字がいいかどうかわかりませんが、これは、どうしても流されていかなきゃならない。流されながら、流されていく自分を自覚しなきゃならんわけで、そうしたときに、おのずから助け合わなきゃならないので、例えば私たちが経験したシンポジウムの形式もその一つの方法でしょうけれども、あるいは、私が思うのは、まず人文科学の方々が自分たちの中でどう共同するか、社会科学の研究者同士の同居をどうするか。どう高め合うか。その上で理工学部の方々とも結びつく、ということが必要なんではないかと思うんですね。

自然科学の場合に、普遍的な対象を相手にするわけで、そして仮説を立てて検証していく上で、だんだんそれが巨大化して行って、普遍化して行って、国境・民族を越えた共同研究になっていくんですね。そういうふうになっていった。それは、例えば冷戦期、米ソ対立のときも、実は共同研究は持続しました。COCOMなどがあって、西側の技術がソビエトのほうに移らないようにとい

う規制があった。それで例えば、東芝の関係の企業のモーターのスクリー音、その問題でソビエトに輸出したものが問題になって、東芝叩きがありましたよね。その現実の社会、技術と絡んだところでは対立があって、非常に激しい対立があったんですが、しかし実はその時代も共同研究は持続しておりました。だから、例えば1976年に最初に私がソビエトに行ったのは、ソビエトに呼ばれて、呼ばれた先がクリミア半島、ヤルタですね。ヤルタ会談のところで、スターリンやチャーチルとかルーズベルトが座った椅子があって、私はそこに座られました。その頃にもずっと、確かにデタント期ではあったんですけども、行き来がありました。論文交換をしましたし、それがずっと続くんです。

じゃあ現在と近い将来はどうか。これは、今度は米中対立なんですけども、共同研究はこういう形で続くのか。ワッセナー・アレンジメントなどがあって、COCOMに代わるような形で規制がこれから現実問題としてあるでしょうけれども、じゃあ研究はどうか。私は続くと思います。今まで続いた研究が、やはり続くと思います。これが自然科学の宿命だと思います。自然科学が持っている慣性（イナーシャ）がそうなんです。じゃあ、人文科学、社会科学はどうなんだ、と。やはり普遍性は根底にあるわけですから、どこかでやはり共同研究が要る。そこで、私はちょっと疑問に思うんですけども、私たちは共同で論文を書きます。しかし人文科学の場合、共同研究というのはあまりお目にかからない。じゃあ、それはなぜなのか。皆さんはどうそれをお考えなのか。人文科学の世界も閉鎖系ではないので。だけれどもやはり、個々人の責任において論文は書き、個々人の美的基準というか、道義的〔?〕基準というか、それに合う形でしかなかなか論文は書けない。それはなぜなのか。それが今後も持続するのか。例えば日本の文化の中に、面白いわけですね、俳諧の連歌をつくるというようなのは、まさに共同作業でやっていくわけですね。日本辺りから、日本の社会学者、日本の人文科学者が、共同で論文にチャレンジすべきじゃないのか。その一番出始めは、私は、教え子と共同研究することではないか、と。そこは論文として書くべきではないのか、と。それがもしできないとしたらなぜなのか。

例えば柏先生とけんかしたことがあるんですけども、荒木先生は、教え子の学位を、なんとかして頑張って、そこまで持って行ってほしいと言って、育てた者が実際に学位を取ったときに柏先生のとさだったんですね。お祝いで、ケーキとお茶でお祝いしてくれました。でも、柏先生は、京大が横にあるじゃないかという、そういう表現をときにするんですね。それで僕はけんかしたんです。荒木俊馬先生は、やはり創設者、創立者として、わが大学という意識が、気持ちが非常にある。わが愛する大学を完成させたい、この大学で大学院博士号を出して、と。実際に博士号を出したら、その翌々年ぐらいから、海外から学位を取りたいというのでこの大学へ来てくれました。フィンランドからカイペイポネンという非常に優秀な光の研究者が来ました。その当時はヨエンスー大学だったんですが、そこはまだ修士課程しかなくて、博士課程がなかった。カイペイポネンは、その

大学の講師だったんですけれども、京都産業大学に来て実際に学位を取る。そして、またもう一つ例を挙げますと、今問題になっているウイグル自治区ですね、新疆大学の講師だったビラル・イリアスが来ました。そして研究し、学位を取って帰って、助教授になって、教授になる段階で、実は奥さんを連れて、子どもを連れて日本に逃げてきます。そして、日本に帰化しました。そういうふうには、異常な大きいダイナミズムがそこにあるわけですね。これは、荒木俊馬先生が望んでいたものだとことです。なぜ……〔この共同性のダイナミズムを再現できないのか〕。先ほどの佐藤吉昭先生が、学位を60歳の後半で取られたわけなんですけれども、やっぱり京大へ行って取ってくる。うちで取ればいいのにね。そういうことを私はここで疑問として、共同研究をするときに、自らに尋ねて自らに問いかけてほしい、何か足りないところはないのかということ。私はこう予言したいんですけど、この時代は、やがて人文科学も、社会科学も共同研究が不可避になる。人文科学も社会科学も、やはり仮説を立てて検証をし、実証していく。そういう時代だと思います。

例えばピケティがマルクスをこの現時点において検証しています。そして、マルクスの指摘が正しいということ、あらためて発表していますよね。研究発表をして、書物にしています〔トマ・ピケティ『21世紀の資本』みすず書房、2014年〕。また、ユヴァル・ノア・ハラリは、一所懸命勉強して、膨大なデータを駆使して、やはり彼は仮説を立て、十何年前からSNSでそれを発表して、私は聞いていましたけれども、それがやがてまとまって、書物になって、皆さまもご存じだと思うんですけれども〔ユヴァル・ノア・ハラリ『サピエンス全史』河出書房新社、2017年〕。彼、ハラリがやっている過程を私は見ていましたけれども、まさに仮説と検証をやっていたわけです。人類が言語を、言葉を獲得して行って、その人類のこの社会、グループを作っていく。そして農業革命が起こって、という。それは、彼はやはりそういう分析をして、データを蓄積して、着想を得て、仮定を置いて、仮説を置いて、それをさらにそうだとことを確認していったわけです。彼は、自らの中でそれをなしていった。しかし、やはりそれが共同の形で、もっと粗めな共同の作業の形で成されて当然だと、私は思います。研究発表の形式もどんどん変わっていくと思うんですよ。

自然科学の場合、これはぜひ強調したいんですけれども、例えば、DNAの二重螺旋の短い論文ですけれども、それはわれわれの自然認識を根本から変えましたね。それに対する、やはりポーリング〔Linus Pauling〕なんかはそういう着想を実は持っていましたし、フランクリン〔Rosalind Franklin〕が実験をやって、X線の解析からその着想を得ていた。3人組が、ワトソン〔James Watson〕、クリック〔Francis Crick〕たちですね、それを取って自分たちの成果にして、ワトソン＝クリックの二重螺旋ということになっちゃっていますけれども。しかし、その研究のプロセスを見ていくと、やはりある着想、仮説があり、ポーリングのような天才的な着想があり、そして緻密なフランクリンなんかによる丁寧な検証があり、それとそれを踏まえて、さらにそれが明確な二重螺旋という形で短い論文になって出てきて、それが後のあらゆる生命体に対して、どんどんそれが確

認されていったわけですよ。そのときに、自然科学だけでなく、人文も社会も、ハリがやったように、やはりある着想を得て仮説を立てたときに、その段階でもう論文発表をすればいい。1ページか2ページの論文でいい。それは例えば、分野の違う社会の分野と経済の分野と法学、歴史の分野の人が、お互いに確かめ合って、それを仮説として論文を出す。そういう形で、共同の短い形の Letters というような形で、論文が出る。今自然科学の場合、ノーベル賞というのは Letters というのが多いんですよ。だから、ジャーナルの発表の形式も変わってくるんじゃないかと思いますね。

その第一歩として、私が強調したいのは、教え子との共同がない。なぜなのか。自然科学、工学の場合は〔共同研究は〕当然なんですけどね。とうい、そうでないと、仲間を増やしていかんとどうしようもないんですからね。それを、社会科学、人文科学でなぜ為さないのか。なぜそれが為されないのか。教え子と一緒にやらんと、もうこれは自分だけではできないぞ、そこまで悩んで、何か着想を掴まなきゃならない。僕はそうあるべきだと思うんですよ。これは、皆さんに対する質問というか、これは大学全体としてもそうだと思うんです。

これは次に、世界問題研究所の問題だけではなくて、組織のモーメンタムですけれども、わが産業大学はどうなんだ、と。それは、歴史、民族、国家、さまざまな組織があつて、それが勃興し、力を失い、—それを皆さんは研究していますよね—その中で、いかにより後継者を育成することが大事であるのか。

先ほど川合さんの研究室にちょっと寄って、ぱっと目の前にビスマルクの本があつて、あ、と思うんですよ。カイザー・ウィルヘルム1世とモルトケとビスマルクが、プロイセンからドイツ帝国を創り上げた。まさにモーメンタムが大きい活力を持って、組織が出来上がった。1888年、後継者が亡くなり、孫が跡を継いだ。カイザー・ウィルヘルム2世ですね。そして、愚かなカイザー・ウィルヘルム2世がビスマルクを追いやっちゃう。モーメンタムは失われていきます。世界第一次大戦というふうに、モーメンタムが失われていきます。よき後継者を持つ、よき後継者を育成することに失敗したら、見事なドイツ帝国が崩壊してしまいました。それは、大きい組織であれ、小さい組織であれ、そうなんです。町工場だってそうなんです。

われわれは今、大学、あるいは研究所のことを論じているわけで、その場合は、真の研究者、真の教育者を育成していかなくちゃならない。組織のモーメンタムをいかに維持し、高めていくか、守っていくかというのは、非常に大事で、これは、第2回のシンポジウムのときの議題になっていたわけです。

自然科学、物理学の例をちょっと言いますと、ニュートンの運動方程式というのは、まさにモーメンタムの変化が力だというのが、これがニュートンの運動方程式なんです。太陽の周りの惑星の運動もそうですし、物体が落下する現象もそうです。おおよそ運動、われわれが目にする運動というのは、運動量の変化、それは力であるというのは、数式の上に乗せることができます。それを解

けば、惑星が太陽の周りを公転運動している、それが記述できます。そして、この運動量、モーメンタムというのは何かというと、物質質量と速度〔の乗〕なんですね。どれだけの物質質量を、限られた時間にどれだけの距離を移動させるかというのがモーメンタムなんですから、これは自然科学の場合には非常に定量化しやすい。一方、組織のモーメンタムは何なのかというんですね。そこで、組織へのロイヤリティ、組織への忠誠心、これが非常に大事だと思うんです。果たしてわが大学は、そのことを意識したことがあるのか。というか、わが大学に禄を食んでいる先生方、実際にそういうことを自覚したことがあるのか。これは、民族や国家にとどまらず、身近な組織の中で、身近なわが大学でそうだと私は思います。大学、研究者にとっても、後継者への意識が非常に大事です。非常に優れた卒業生がいます。研究論文も書いています。だけれども、わが大学に〔教員としてどれだけいるのか〕。わが大学の職員の中には卒業生はいますよ。先生方の周りを見渡していただきたい。ものすごい研究の力を持っている人が非常勤講師、あるいは高校、予備校の先生をやりながら、いまだに研究をしている人もいますよ。そういうことを考えてみたことがあるのかどうかというのを、これは大学に対しても尋ねたい。これは非常に大きい問題だと私は思います。

トインビーが指摘しました。生まれ育った祖国への忠誠心と、一体化しつつある人類社会への忠誠心、これをどう調和させ得るのか、と。今やこの一体化しつつある人類社会は、危機的な地球環境の問題が絡んでいるわけですね。地球運命共同体への忠誠心が今問われているわけです。このことは世界問題研究所の大きいテーマだと思います。わが大学のテーマでもあるし、わが日本のテーマでもある。世界のテーマでもあるわけです。最後の2つは、かなり身勝手なことを指摘しました。以上で私の話は終わろうと思います。

質疑応答の再開

司会：ありがとうございます。先生方、いかがでしょうか。全体を含めて、何かご質問などがありましたら、承りたいと思いますが。岩本先生、何かおありでしょうか。

岩本誠吾：どうもありがとうございました。法学部岩本でございます。今日は、世界問題の歴史から、今後の世界問題研究所のあり方まで、幅広くお話を聞かせていただきまして、大変勉強になりました。私のほうから一つ簡単というか、最後のほうで言及された共同研究について、お伺いしたいと思うんですけれども。米ソ対立とか、米中対立があっても、自然科学の場合はできるというふうにご指摘されたと思うんですけれども、その点について、私は疑問がありまして、米ソの覇権争いとか、米中の覇権争いの中で、共同研究をすれば、どうしても相手に自分らのいいところが真似されるとか、そういう意味では、自然科学というのは、一部においては囲い込みという表現が正しいかどうかかわからないんですけれども、囲い込みのようなことがないのかどうかということが質問でございます。それと、社会科学と自然科学と、今後どのような共同研究をしていくのかという場合に、先生がご経験された、三木先生の法哲学とか、廣岡先生の政治学とか、そういった場合の共同研究

の、何かアドバイスと言いますか、以前の共同研究ではこういうことに心がけたというか、そういう点がありましたら教えていただきたいというふうに思います。以上です。

曾我見：ありがとうございます。2つに分けられると思うんです。先ほど私が、冷戦期、米ソ対立のシビアな時代にも実は共同研究が持続していた、と。これは歴史的事実なんです。1つは、その自然科学の中で、私自身が一番コミットしていたのは、素粒子論とか、核物理学の中にも多少絡みますが、世界の研究の拠点として、例えばヨーロッパに CERN〔欧州原子核研究機構〕というのがありますね。そこにはですね、やはりソビエトの連中も冷戦期でも行き来がありました。そして CERN に対抗するように、ソビエトはドブナに大きい研究所〔合同原子核研究所〕を作りました、全員集めたら1万人というような。私はこの研究所にソビエトの時代に二度行っています。確かに研究所に入るときに、機関銃の銃座があるわけですよ。そして兄ちゃんあんがそこに座っているんですね。そこを回ってその中に入って行くわけですが、入っていったら、もう別世界になるわけです。

なぜその共同研究が持続するかというと、ソビエトも、アメリカも、溢れ出るまで研究が、あるいは技術が達してしまうと、お互いの微妙な部分の違いはあっても、それ自体がお互いに慣性を持って、ほとんどパラレルに進んでしまうんです。それ自体がモーメンタムを持っているんです。そして、お互いがその違いを検証し合うというか、そうだったなという確認で研究会が行なわれたり、国際会議が行なわれたりするわけです。これは、現場に入ってしまったら、本当に押し流されるというか、それぐらい研究の対象というのは客観的であって、その独自性が持続するんですね。ただ、そこに、飛躍をしていくポイント、ポイントドット〔?〕で違いが出てきて、それが累積していった大きい違いになる。冷戦期の米ソ対立、そのときに共同研究が大事だということを人々が自覚していたのは、第二次世界大戦の頃の、大同盟の頃のマンハッタン計画です。それをソビエトはいろいろな形で、今岩本さんが指摘された秘密のリークも含めて、ソビエト自身も開発を実は進めていたわけですね。その段階で、なんとか、— 両方とも共通の結果に行き着くところは見えているわけで — なぜなんとか調和を図れなかったのかというのが、ニールス・ボーアの提案でもあったんですね。調和を保って議論し合え、と。ところが逆に、ニールス・ボーアが監視されるような立場になって、〔米ソが〕個別に、考えられないような勢いで原爆と水爆をつくって、過剰なものをつくってしまったという、そういう歴史があります。岩本さんが指摘されるとおり、そういう危険があります。それが商業的なものに絡むと、COCOM というような形で調整があったわけですが、研究というレベルでは、実は持続していました。今後も、中国の〔研究者〕連中も、同じように今も論文を書いて、アメリカやヨーロッパの連中も論文を書いて、そして論文を送ってきて、送り返してというのが今も続いていて、それは持続するのではないかと思います。お互いが持続するというか、認識し合うことによって、危険な方向に行かないという方向に持ってほしい。

例えばこの前岩本さんが教えてくれたんだけど、金門島に行った、と。金門島で水を中国からパイプを引いて、供給を受けている。そういう状況ですよ。金門島の人たちはそれがないと生活できない。今台湾の問題で、中国の戦闘機が領空侵犯しているわけですけども、その反面、まさに岩本さんご自身が行って、自分の目で確かめられたように、もっとも大事な水が中国から供給されているわけですね。だから、僕はそれを岩本さんに教えてもらったときは、うーんと思ったんですが、ジャーナリズムとかいろんなことで騒がれるような対立の背後に、やはり対立を超えるような何か、中国大陸からの金門島への水の供給のようなね、私は何か、ちょっと甘いかもしれませんが、岩本さんの専門家から見たらちょっと甘いと思われるかもしれませんが、やはり何らかの形で共通の部分を持続するのが、平和を維持する上で大事なんじゃないか、と。

たぶん冷戦期に基礎研究なんかで、ソビエトと、例えばアメリカ、あるいは日本と、共同でいろいろなことをやっていたということは、意外と皆さん知らないと思います。1つ例を挙げます。1976年、私はソビエトで会議に最初に呼ばれたときに、さっき言いましたが、ヤルタであったんですけども、ソビエトの原子炉の第1号を設計したプロフィンチェフという先生と一緒に、ヤルタの丘の上を散歩したんですね。そのときに、ソビエトの黒鉛炉、原子炉が不安定で、本当に困って、そして、いつ事故を起こすかわからんで、不安定で困っているのを、日本の軽水炉を日本と共同研究したい、と。実際にそれを数年間やったというんですね。そして、日本と行き来もあった。それはまさにデタントのときだったんです。ところが、諸般の事情でそれが動かなくなって、非常に残念だということですね。そしてプロフィンチェフ先生が言うのは、黒鉛炉を動かしている途中でプルトニウムはどんどんできる、と。そして、最初は、軍はそれで原爆、水爆を作れるので、そちらに持っていったんですけども、爆弾を作るのにも、手に余るほどそれが増えてきた、なんとかしなきゃならない。そして日本とソビエトの研究者たちが助け合った。2年間やったらいいですけどね。それを本当に達成したかった。それがちょうど1976年の4月の後半から5月の初めだったんです。ちょうど10年後にチェルノブイリ事故が起こります。私自身は原子炉の研究者ではないし、当時もないんですけども、そういうことを生身で聞いて経験しますと、やはりどこかで情報交換、意見交換が持続することが安全のために必要不可欠ではないか、と。それが最初の点です。

もう1つの質問は？ 岩本さん、もう1つのほうをちょっと補足していただけませんか？

岩本：先生が経験された理工学部、人文科学、社会科学の共同研究、三木先生とか西原先生とか廣岡先生とか、その時期に共同研究されたというご経験から、われわれ今、文理融合の研究をしようとしているわけですけども、何か心がけるようなことがあれば、アドバイスをいただきたいということです。

曾我見：そうでした。それがむしろ大事なほうだったですね。実は、私は共同研究を踏まえた上で、個別研究をとっているので、マンハッタン計画なんかを調べたりしていて、それを一緒に外語の中山昭

吉²²⁾さんとか、そして廣岡さんなんかも含めて、一緒にその続きの研究をしたかったんですが、やっぱり難しいなということで、本当は共著の論文を書いたらどうだというのは、私は先ほど言いましたけどね、実際にそれをやりたいなと思った。しかしそれはやっぱり難しい。三木先生とは格が違うというか、三木先生を私は尊敬して、一緒にというのはなかなか言いにくい。三木先生のごとも理解することに努める段階でしたからね。そして若泉先生は、やはり現実政治、現実の世界というか、国際地盤、国際政治の場に立って、その自分を支える何かということで、常にそれを意識されていたので、それもお話ししたとしても、それ以上の共同研究、共同論文というようなところにはなかなか行かなかった。共同論文の経験は、産業大学のメンバーとは理学部の中ではたくさんありますが、学部を越えては、外国科学部のレスリー・サケット氏²³⁾が私のところによく来ておまして、共同で何か書けないかということで、1つ論文を書きましたけども²⁴⁾、それは非常に限定した形、テーマを限定してしか実現できませんでした。

今後、皆さんがこの新しい研究テーマで共同研究を進めるときに、やっぱりどこかで思い切ったことをやってほしいという思いがあります。その1つは、短くていいから、2人なり3人なりで、こういう仮説、こうではないかという形で、論文を書かれたらどうなのか、と。幸い世界問題研究所の紀要、所報がありますから、チャレンジしたらどうなのか。それが自然科学の場合と言ったら2ページ、3ページで、長くて5~6ページ。ノーベル賞の対象になるなんていうのは、全部そんなんですよ。ノーベル賞を狙えとか、そういうことではなくて、その短い論文というのは、問題提起をする論文というのは、非常に大事なんです。そのことに対して、社会科学、人文科学の先生方は非常に慎重で、そしてやはり自分の審美眼というか、自分の尺度、自分が納得して、言うなれば言い切ってしまう。美的感覚まで生み出すような形で、文章のスタイルまで気にして論文を発表される。三木先生がそうだったんですけれども、もちろんそれはそれでいいんです。それを一回そこから脱皮するというか、それはそれでやられたらいいんだけど、それとは別個に短くていいから、大胆に提案をする、提唱するというような、今後検証を皆さんしましょうよ、してくださいよ、というような形の論文、それも論文なんです。Lettersでチャレンジしてみたらどうなんでしょう。各自が学会を持たれて、その学会の中でのいろいろなつきあいがあって、そこからのお互いの評価で、あいつはこういうことを言う、こういうふうに語る人間だと、こういうものの考え方をする人間だという位置づけでおられると思うんですけどね。それとは別個に、あるいはその中で大胆になって、今、岩本さんが何か今後の研究所のあり方とか、皆さんの今後の研究の方向性とかに対して何か指摘を、と今促されたので、思い切って私はそういうことを言いたいです。それは、世界にそういう例がどこかにあるのではないかと思うし、なかったらなかったでそれを大胆にやったらどうなのか。それを指摘することによって、それを踏まえて歴史を見直すなり、文献を見直すなり、いろんな国の方がですね。しかもその短い論文を、ヨーロッパの言葉で書いて発表するというよう

な、そういうチャレンジがあってもいいんじゃないかと思うんですよね。自然科学では、それは為されているんです。

岩本：ありがとうございます。

志賀浄邦：志賀です。曾我見先生、どうもありがとうございました。ご無沙汰しております。曾我見先生には、益川塾のほうで大変お世話になりました。研究室に一度お招きいただいて、コーヒーを入れていただいたことを、大変印象深く覚えております。コーヒー豆を手でひいてくださって、そして研究室のその場でコーヒーを入れていただいて、非常においしいコーヒーの味を今でも覚えております。

質問なんですけれども、先生のお話を本日お聞きして、私は仏教を研究していますので、仏教との関係ということをお聞きしたいなと思うんです。ご講演のお話の中で、前半は日本文化論、あるいは日本人論という話で、後半は湯川先生の湯川理論の話をお話しして下さって、まったく別の話かなと思いきや、非常にパラレルなコースになっていて、最終的には中間子なり、間を取り持つ存在になりますね。あるいは創造性とか、創造力ということになるかもしれませんが、非常にびったりと重なっていて、本日の話の構造と言いますか、それ自体にも非常に感銘を受けた次第です。それと少し関係するんですが、私自身は、湯川先生が中間子というものを着想された、着想の源みたいところに非常に興味を持ちました。そこに、私が門外漢で本当に申し訳ないんですけど、湯川先生自身は漢籍の素養というか、非常に深い教養があられたりとか、東洋思想なりを非常に勉強されていたという話も聞いたりしたことがあります。その中に仏教というものが関わっていたのかどうかという話を聞きたいなと思っています。あとは、京都産業大学と仏教というか、そういう関係ということ、私たちが知っている限りで、これは文理融合と関わるかもしれないので申し上げますと、荒木先生が天文学者であったわけですが、仏教の宇宙論と、その当時の最新の宇宙論、段階宇宙論という、宇宙の無限性、有限性みたいな話ですね。段階的に宇宙というのは広がっていくという、私も詳しくないので分からないんですが、そういうものというのが、実はアピダルマですね、仏教の経典にそういった記述があるというような、短い論文をそれこそ出されていて、その当時、大谷大学から山口益先生という、この方は本当に中観の、仏教哲学の本当に大学者で、私も日々参照させていただいている、そういう方なんですけど、そういう方が関わっておられて、そのあとに一郷先生という方が産業大学にも入られて、そういうことをされていて、仏教のほうにも、原子論とか、極微と言うんですけど、原子論なんかがあったりします。

あとは、今日の後半の湯川理論のお話をお聞きしていると、何か、これはどうしても自分の専門に寄せて見てしまいますので、そう見えてしまうのかもしれないんですが、そういう仏教の原子論、原子論とはもちろん違うわけですけども、そういったこととか、あるいはもう少し近いもので言うと、因果論であったり、縁起の思想であったりとか、そういったこととか、類似性というか、

近似性というか、そういうものを非常に強く感じました。私は湯川先生の間中子というもの、あるいは別のさまざまな理論、提起されたものの着想のところに、なんらかの東洋的なというか、あるいは仏教のそういうものがあつたのかどうか。もし先生のほうでご存じでしたら、教えていただきたいということです。

曾我見：そうですね。これは話し出すといろいろと広がると思うんですが、ちょっと絞りますと、最初の荒木俊馬先生の宇宙論と言いますか、それに関係して、最初にちょっとお話ししますと、例えば京都には三千院があるわけですね、大原に。その三千というのは、実は $1,000 \times 1,000 \times 1,000$ なんですね。900、1,000、1,100 といつて、2,000、2,100、2,900、3,000 の三千ではなくて、1,000 が3つ重なっているんですよ。そういう階層的な宇宙というか、そういう宇宙一つ一つに如来が住み、そして如来たらんとする菩薩が修行を重ね、われわれがそのうちの $1,000 \times 1,000 \times 1,000$ の宇宙、だから10の9乗の宇宙の中の1つの宇宙にわれわれがいる、と。その仏教のそういう考えというのは、今の宇宙論に非常に近いんです。ただその中に数式を入れて、いかめしく、それで飾り立てて議論をするわけです。なぜそれだけ多数ある宇宙の中のこの1つにわれわれがなぜいるのかとか、なぜ1つのそういうわれわれの宇宙が選ばれるのかとか、そういうことを研究対象にする、そういう輩——と私はあえて言います——がいます。数式を振り回してそういうことを論じる。でもそれは、実証科学の延長上にそれが位置づけられるかどうかは、まだまだ分からない。確かにわれわれの宇宙は、空間3次元で、時間が1次元なんですけれども、なぜ空間2次元の世界がないのかとか、異聞で空間が4次元、5次元の世界があつても然るべきだ、と。空間10次元の世界、超弦理論なんていうのは、そういうことにつながるんですけれども。その中の1つの宇宙がわれわれとか、ですね。しかし、そういう思弁の世界は、本来の自然科学、実証を重ねた自然科学とは、やはり途切れた世界なんですね。もちろんそういう思弁の世界はあり得て、そしてそれで食っていく人たちもいます。そして、東京大学や京都大学にはそういう人がいたし、今はだんだん勢力がなくなって、幸いなことなんですけれども。荒木俊馬先生はそういうことに興味をお持ちでした、一つ目の宇宙論に関しては。そしてインドの人たちというのは、そういう思弁が大好きなんです。

それでもう一つの原子論に触れますと、アヌですね、粒子、1個の粒子がある。その前後、左右、上下、真ん中に1つあつて、上下に2つ、左右に2つ、前後に2つ。7個集まると、1つの単位ができる。出来上がったものがまた7個集まって、さらに次の階層ができるというようなかたちで、仏教の原子説というのがあつて、それはそれで非常に面白いし、いかにもインド人らしい、インド人の思弁を楽しむ、インド人らしいんですけれども、やはり本当に実証しようとする、それは現在われわれが達成してきた原子説とは違って来るわけですね。でも、インドの人たちは、本当にそういう思弁が好きです。実は、私は、研究仲間、弟子も含めてインド人は多いんですけれども、1人ずば抜けたのがいまして、今、インドの科学院の総裁になっています。スッドと言うんです。彼

が研究を始めたときに、私の理論を使って、そしてどうしても行きたいと言うので日本に来ました。非常に活発な人で、もう私なんかを乗り越えて、さっき言いました生命科学と化学と物理のちょうど間ぐらいのことをやっています、そして活発です。今は67歳になりましたけれども、65歳でバンガロール大学の定年を迎えましたけれども、あと5年間、自由に研究をする。ただ、給料はなし、研究費は出す、と。弟子の面倒は見なさいというので、いまだに研究を続けています。インドの人たちを、私は大好きです。ただ、やっぱり非常に思弁が好きなんです。実証はある段階で飛び越えてしまう。でも、スッドはそうじゃなくて、イギリスのロイヤル・ソサエティのメンバー、インドから3人選ばれているうちの1人なんです。インドには非常に近い思いを持っています。

湯川先生も、中国の古典ですね、荘子とか、老子。そして、やっぱりインドのヒンズーの思想なんかに興味をずっと持っていた。ただやはり、おじいさまが漢学者だったので、子どもの頃からそういう素養が身についていますので、中国の思想のほうがより濃厚ですね、湯川先生の場合ですね。仏教思想、湯川先生の間子なんかになると、中にはやはりそういうものがあるんだと思いますけれども。また志賀さん、いろんな議論をしましょう。教えてください。

志賀：ありがとうございます。よろしく願います、今後とも。

司会：ありがとうございます。ほかに何かおありでしょうか。これぐらいにしますか。真理館 SR309 に懇談用の部屋を別にとっておりますので、もし曾我見先生と直接お話しされたいという方がおられましたら、お手数ですが、SR309のほうへおいでいただけると、直接質問がいただけます。よろしければ、ぜひそちらへおいでください。では、だいぶ長時間にわたりましたが、今回の研究会はこれで終わりたいと思いますが、川合先生、よろしければ少し締めの方を。いいですか。

川合：いいでしょう。

司会：今日の研究会は以上とさせていただきますと思います。曾我見先生、ありがとうございます。

曾我見：ありがとうございます。勝手なことばかり申しまして。

司会：とんでもございません。ありがとうございます。先生方もありがとうございました。

(終了)

注

- 1) 若泉敬 (1930~1996)。国際政治学者、世界問題研究所第二代所長 (1970~1980)。
- 2) 当日のレジュメによれば、研究所史は次のように区分される。Ⅰ期：1966~1969年、Ⅱ期：1970年代、Ⅲ期：1980年代、Ⅳ期：1990年代、Ⅴ期：2000年代、Ⅵ期：2010年代、Ⅶ期：2020年代。
- 3) これは、次を指す。川合全弘「京都産業大学世界問題研究所五十年外史1966~2016」、『世界問題研究所紀要』第33巻、2018年3月、1~51頁。
- 4) 荒木俊馬 (1897~1978)。天文学者、本学創設者、初代学長 (1965~1978)、学校法人理事長。
- 5) 岩畔豪雄 (1897~1970)。元陸軍少将、世界問題研究所初代所長 (1966~1970)。

- 6) 三木新。法哲学者、後に世界問題研究所長代理、法学部長を務めた。
- 7) 西原正。国際政治学者、外国語学部教授。後に防衛大学校に移籍し、学校長を務めた。
- 8) 佐藤吉昭。哲学者、後に世界問題研究所長、副学長を務めた。
- 9) この共同研究とは、1976年度から1978年度の3年間、計3回にわたっておこなわれたシンポジウム「世界における日本の文化——いま問われるべきものの本質」を指す。それぞれの回が、次のように問題提起と4つのセッションから構成された。第1回(1976年度)：問題提起(三木新)「日本にとって何が問題か」、第1セッション「日本のエトスについて」、第2セッション「文化の創造性と模倣性」、第3セッション「国際的氏名の自覚」、第4セッション「課題と展望」。第2回(1977年度)：問題提起(三木新)「文化創造の活力を!」、第5セッション「源泉としての宗教性」、第6セッション「日本人の思考と行動」、第7セッション「資質の自覚と体系化」、第8セッション「新しい秩序を求めて」。第3回(1978年度)：問題提起(サイデンステッカー)「日本の伝統文化」、第9セッション「擁護すべきその特質」、第10セッション「危機状況の基本認識」、第11セッション「日本のイグザンプルとは」、第12セッション「総括——現代の超克」。これの記録は次に掲載されている。『京都産業大学論集』第6巻第4号、第7巻第3号、第8巻第4号、昭和52年9月、昭和53年7月、昭和54年6月。これの要約紹介は次を参照されたい。川合全弘「シンポジウム『世界における日本の文化——いま問われるべきものの本質』について」、『世界問題研究所紀要』第35巻、令和2年3月、217～239頁。
- 10) 廣岡正久。政治学者、後に法学部長、世界問題研究所長、学校法人理事長を務めた。
- 11) 「時代の変化」とはレジュメに記された見出しの一つであり、ここでは、当時の時代背景の下で京都産業大学に生じた変化を指す。
- 12) 柏祐賢(1907～2007)。農業経済学者、第二代学長(1978～1996)、学校法人理事長。
- 13) これはレジュメに「外部工学部・短大增設の是非」と記された見出しを指す。
- 14) レジュメに添付された、明恵上人の肖像画(国宝)を指す。
- 15) 和泉式部の歌。当日は簡略なレジュメと記憶に頼って語られているために、『後拾遺和歌集』のテキストとは若干異なるが、むしろ講演者の和歌に対する日頃からの親しみの証と捉えて、あえてそのままにした。
- 16) 湯川摂子。経済学者、後に経済学部長を務めた。湯川摂子の名はこのほかにも同頁から次頁にかけて3か所登場するが、講演中に頻出する「湯川秀樹」と区別するために、本文中では全てイタリック体で記した。
- 17) この個別研究の成果が、第一部でも言及されている次の論文である。曾我見郁夫「諸科学の相互批判への試論(Ⅱ)——大同盟の崩壊と核軍拡競争の勃発——」、『世界問題研究所紀要』第1巻、昭和55年4月、149～181頁。
- 18) 佐藤吉昭「日本人の自然意識——東西自然観の比較研究試論——」、『世界問題研究所紀要』第1巻、99～148頁。
- 19) ヴルピッタ ロマーノ。比較文化論、経営学部教授、後に世界問題研究所長を務めた。
- 20) ヴルピッタ ロマーノ「西洋文明の危機と日本」、『世界問題研究所紀要』第1巻、51～98頁。
- 21) 湯川摂子「新国際秩序・技術開発・人間主義」、『世界問題研究所紀要』第1巻、198～221頁。
- 22) 中山昭吉。西洋史家、外国語学部教授。
- 23) レスリー・サケット。英米語学、外国語学部教授。
- 24) これは次の論文を指す。Leslie C. SACKETT and Ikuo SOGAMI, "A Case Study of Japanese-English Scientific Terms and Phonological Distance", 『京都産業大学論集』第17巻第4号、昭和63年3月、62～80頁。